

# 猪平遺跡・宮ノ下遺跡

——更科カントリークラブ造成事業に伴う緊急発掘調査報告書——

1994. 3

長野市教育委員会

## 序

社会生活の変化とともに「ものの豊かさ」から「心の豊かさ」が求められて久しい今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできない必須要件の一つであります。また国民共有の財産でもあることは言うまでもありません。市民生活の充実、公共の福祉という目的を達成するために民間・公共を問わず多くの開発事業が実施されることになりますが、その陰で失われていく土地に刻まれた歴史—埋蔵文化財—に対し、私達は保護・保存と活用という点において大きな責務を負っているといえましょう。

さてここに更科カントリークラブ造成事業に伴う緊急発掘調査を実施いたしました調査報告書を『猪平遺跡・宮ノ下遺跡』として上梓できましたことはご同慶の至りと申せましょう。発掘調査は平成元年の試掘分布調査の成果を踏まえて平成4年と5年の2次にわたり実施いたしましたので、調査範囲は遺跡の破壊が懸念される部分という限定されたものでありましたが、山の民の生活を垣間見ることのできます貴重な資料を得ることができました。これらの成果は本報告書に記載しておりますので、文化財に対する一層のご理解と、地域文化向上のための一助としてご活用いただければ、この上ない喜びであります。

最後に、発掘調査の実施にあたり、ご指導・ご協力をいただいた長野県教育委員会文化課・(株)更科カントリー・前田建設工業(株)・地権者組合・発掘調査に参加いただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

長野市教育委員会教育長 滝沢忠男

## 例　　言

- 1 本書は、株式会社更科カントリーが施行するゴルフ場造成事業に伴う緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが直轄事業として実施した。その年度は、試掘確認調査が平成元年度、宮ノ下遺跡詳細分布調査が平成4年度、猪平遺跡の本調査が平成4・5年度、宮ノ下遺跡の本調査が平成5年度である。
- 3 調査地は、猪平遺跡が長野市篠ノ井塙崎字猪平776番地他、宮ノ下遺跡が長野市信更町赤田字向山1811-1番地他に所在する。
- 4 実施調査面積は、試掘確認調査が約115ha、本調査が猪平遺跡1500m<sup>2</sup>・宮ノ下遺跡440m<sup>2</sup>である。
- 5 本書は、発掘調査等によって検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点をおいた。
- 6 III章第1節「縄文時代の遺構・遺物」のうち(3)土器・(4)石器の図版・論考は綿田弘美（長野県埋蔵文化財センター研究員）氏に依頼し、玉稿を賜わった。
- 7 遺構の測量は、平面直角座標第VIII系の座標値と日本水準原点の標高を基準とし、コーディックスシステムを援用するため(有)写真測図研究所へ委託した。尚、基準点測量の成果等は(株)更科カントリーより提供を受けた。
- 8 住居址等の遺構図は、1:20の縮尺を基本図にして、1:80の縮尺で掲載した。カマドは1:40、暗渠状遺構が1:180の縮尺で掲載した。
- 9 遺物図は、縄文時代の土器拓影図が1:2で、金属製品が1:2、他の遺物は1:4を基本とし図示した。土器実測図の断面が白抜きのものは縄文時代土器・土師器、綱掛けのものは須恵器(20%)、灰釉陶器(30%)を表現する。器形内の綱掛けは黒色処理されたことを示す。
- 10 遺跡の略号は、猪平遺跡が「SIN」、宮ノ下遺跡が「SMS」である。また遺構の略号は竪穴住居址がSB、土坑をSK、溝址をSDを用いた。
- 11 調査によって得られた諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。

## 目 次

序	
例 言	
目 次	
I 調査地周辺の環境	1
1 地理的環境	1
2 考古学的環境	4
II 調査の経過	7
1 試掘分布調査の経過	7
2 試掘分布調査	8
3 猪平遺跡周辺の試掘坑所見	12
4 宮ノ下遺跡周辺の試掘坑所見	14
5 本調査の経過	16
6 調査日誌	17
7 調査の体制	23
III 調 査（猪平遺跡）	25
1 調査地と地形	25
2 グリットの配置	26
3 遺構の分布	31
4 縄文時代の遺構と遺物	32
5 平安時代の遺構と遺物	44
6 近世以降の遺構と遺物	72
7 猪平遺跡出土遺物観察表	75
IV 調 査（宮ノ下遺跡）	77
1 調査地と地形	77
2 グリットの配置	79
3 遺構の分布	79
4 縄文時代の遺構と遺物	81
5 古墳時代の遺構と遺物	83
6 奈良時代の遺構と遺物	88
7 平安時代の遺構と遺物	93
8 宮ノ下遺跡出土遺物観察表	102
V ま と め	104
1 猪平遺跡	104
2 宮ノ下遺跡	105

## 挿 図 目 次

1図	遺跡所在位置図	1	3 2図	7号住居址実測図	55
2図	調査地周辺の主要遺跡	5	3 3図	7号住居址カマド実測図	55
3図	更科カントリー計画地内 試掘調査位置図	9	3 4図	7号住居址出土土器実測図	56
4図	猪平遺跡周辺の試掘調査位置図	13	3 5図	8号住居址実測図	57
5図	宮ノ下遺跡周辺の試掘調査位置図	15	3 6図	8号住居址出土土器実測図	58
6図	開発予定地(実線)及び 遺跡範囲推定(点線)図	25	3 7図	9号住居址出土土器実測図	59
7図	地形及びグリット配置図	26	3 8図	10号住居址実測図	60
8図	グリット配置図	29	3 9図	10号住居址出土土器実測図	60
9図	遺構分布図(1)	29	4 0図	11号住居址実測図	61
10図	遺構分布図(2)	30	4 1図	11号住居址カマド実測図	62
11図	縄文時代土坑実測図	32	4 2図	11号住居址出土土器実測図	63
12図	縄文時代土器石器出土地点図	35	4 3図	12号住居址実測図	64
13図	縄文時代土器拓影図	37	4 4図	12号住居址カマド実測図	64
14図	縄文時代土器拓影図	38	4 5図	12号住居址出土土器実測図	65
15図	縄文時代土器拓影図	39	4 6図	柱穴群1出土土器拓影図	66
16図	1号住居址出土土器実測図	44	4 7図	1号建物址実測図	66
17図	1号住居址実測図	44	4 8図	柱穴群2実測図	67
18図	2号住居址出土土器実測図	45	4 9図	柱穴群3実測図	68
19図	2号住居址実測図	45	5 0図	平安時代土坑実測図	70
20図	3号住居址実測図	48	5 1図	グリット出土土器実測図	72
21図	3号住居址カマド実測図	48	5 2図	金属製品実測図	72
22図	4号住居址暗渠状遺構	49	5 3図	建物址出土土器実測図	73
23図	4号住居址カマド実測図	49	5 4図	建物址実測図	73
24図	4号住居址出土土器実測図	49	5 5図	暗渠状遺構実測図	74
25図	5号住居址実測図	51	5 6図	開発予定地	77
26図	5号住居址カマド実測図	51	5 7図	地形及びグリット配置図	78
27図	5号住居址出土土器実測図	51	5 8図	グリット配置及び遺構分布図	80
28図	5号住居址小鍛冶遺構実測図	51	5 9図	縄文時代土器拓影図	81
29図	6号住居址実測図	53	6 0図	A 2号住居址実測図	83
30図	6号住居址出土土器実測図	53	6 1図	A 2号住居址出土土器実測図	83
31図	6号住居址カマド実測図	53	6 2図	A 3号住居址実測図	84
			6 3図	A 3号住居址出土土器実測図	85
			6 4図	A 5住居址実測図	85

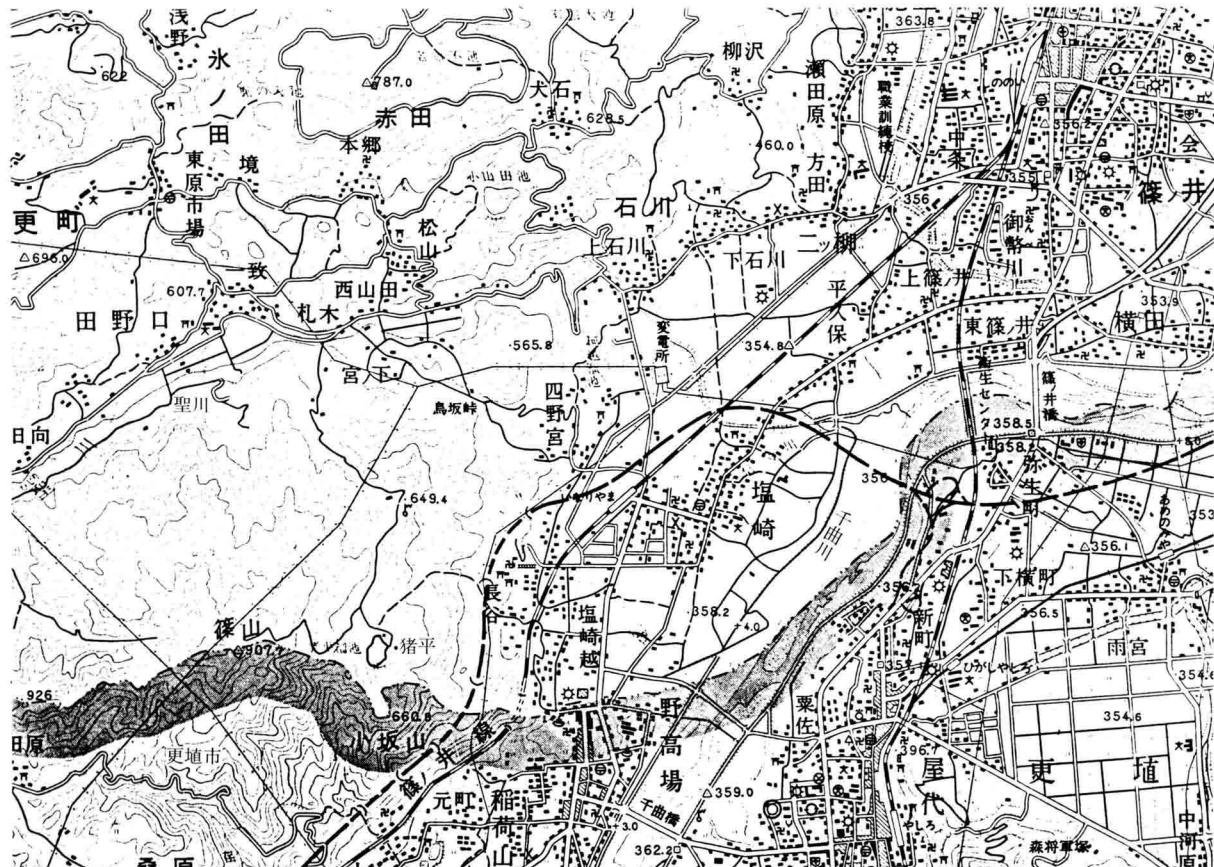
6 5 図	A 5 号住居址出土土器実測図	85
6 6 図	B 3 号住居址実測図	86
6 7 図	B 3 号住居址出土遺物実測図	87
6 8 図	A 5 号土坑実測図	87
6 9 図	A 5 号土坑出土土器実測図	87
7 0 図	A 1 号住居址実測図	88
7 1 図	A 1 号住居址出土遺物実測図	89
7 2 図	A 1 号溝址実測図	91
7 3 図	A 1 号溝址出土土器実測図	91
7 4 図	A 柱穴群実測図	92
7 5 図	A 柱穴群出土土器実測図	92
7 6 図	A 4 号住居址実測図	93
7 7 図	A 4 号住居址出土遺物実測図	94
7 8 図	A 6 号住居址実測図	95
7 9 図	A 6 号住居址出土遺物実測図	97
8 0 図	B 1 号住居址実測図	98
8 1 図	B 2 号住居址実測図	98
8 2 図	平安時代土坑実測図 , A 2 号土坑出土土器実測図	99
8 3 図	グリット出土遺物実測図	101
8 4 図	鉄製品実測図	101

# I 調査地周辺の環境

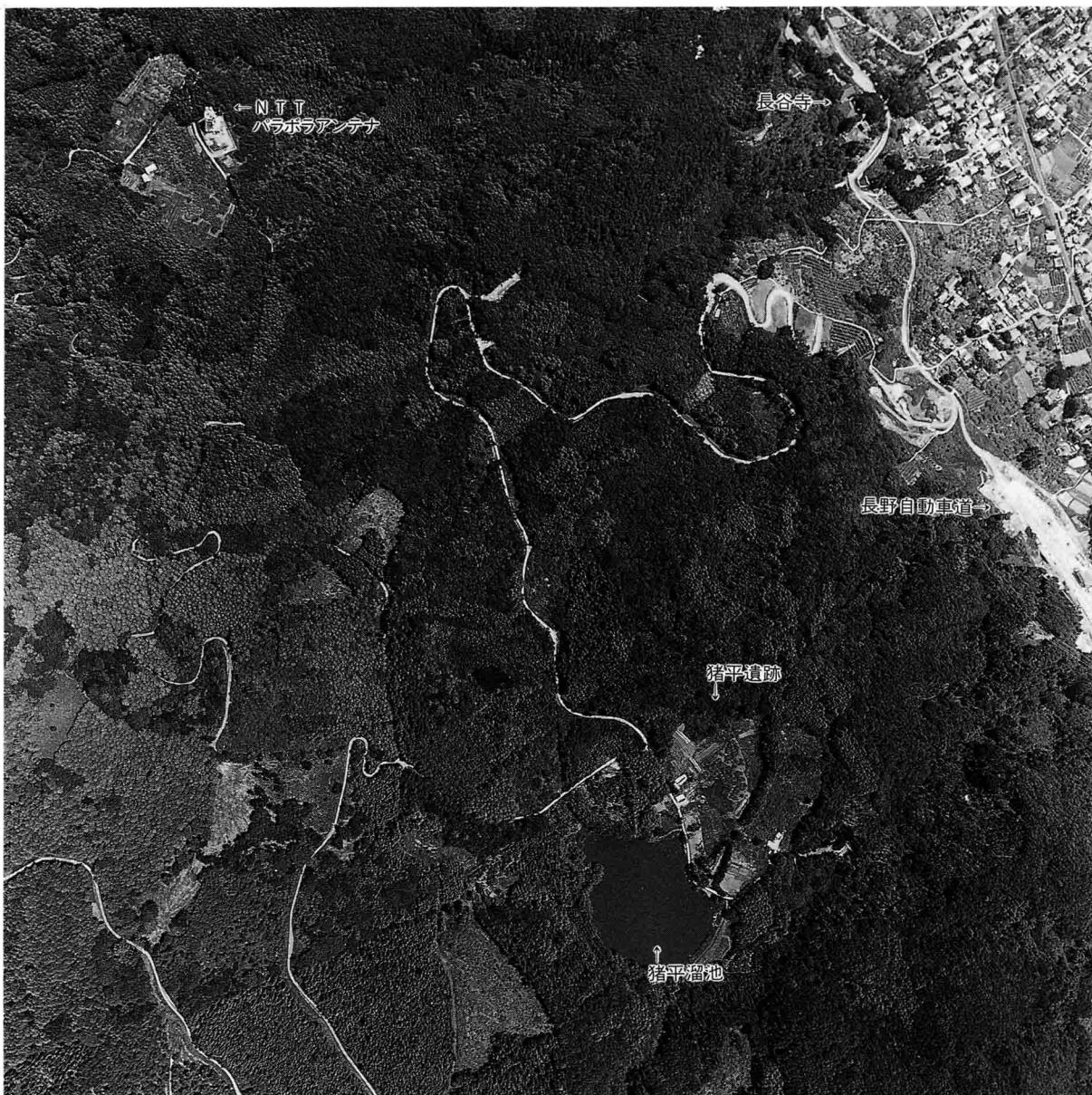
## 1 地理的環境

### [猪平遺跡]

長野市西南縁に更埴市との境界を山頂に有する標高907.7mの篠山がそそり立つ。この山は火山性の造山運動により形成されたものと考えられ、安山岩により構成される。この中腹標高634~650m付近に平坦丘陵があり、崖錐様堆積物で覆われており、篠山からの崩落によるものと考えられる。今でも地滑り地域に指定されている。猪平遺跡は、この崩落地頂点の南端に位置し、標高650.7mの小円丘様高地北側の斜面及び標高540m付近の平坦地に展開する。千曲川沖積面（JR稻荷山駅付近）からの比高差は280mを測り、東斜面は急傾斜を呈し、千曲川沖積地より隔絶した地域としての感が強い。しかし、遺跡の立地面から見ると、西側前面には延宝7年（1679）築造、大正10年（1921）改修、昭和38年（1963）竣工した約4haに及ぶ猪平溜池が広がり、旧来は湿地または小沼と推定され、条件としては最適な地といえる。猪平溜池は三筋の湧水で満たされるといい、流下する扇状地状の谷地形には小規模な棚田がみられるが、今は廃棄されている。遺跡の主体部は、畑・果樹園・一部山林であり、孤立した山中であっても古代から居住・生産の適地として現在に至るまで、連綿とその痕跡がうかがえることは、地理的に見ても遺跡の性格を規定するように思われる。ちなみに「猪平」を地元の人達は「インテラ」と呼称し



1図 遺跡所在位置図 (1 : 50,000)



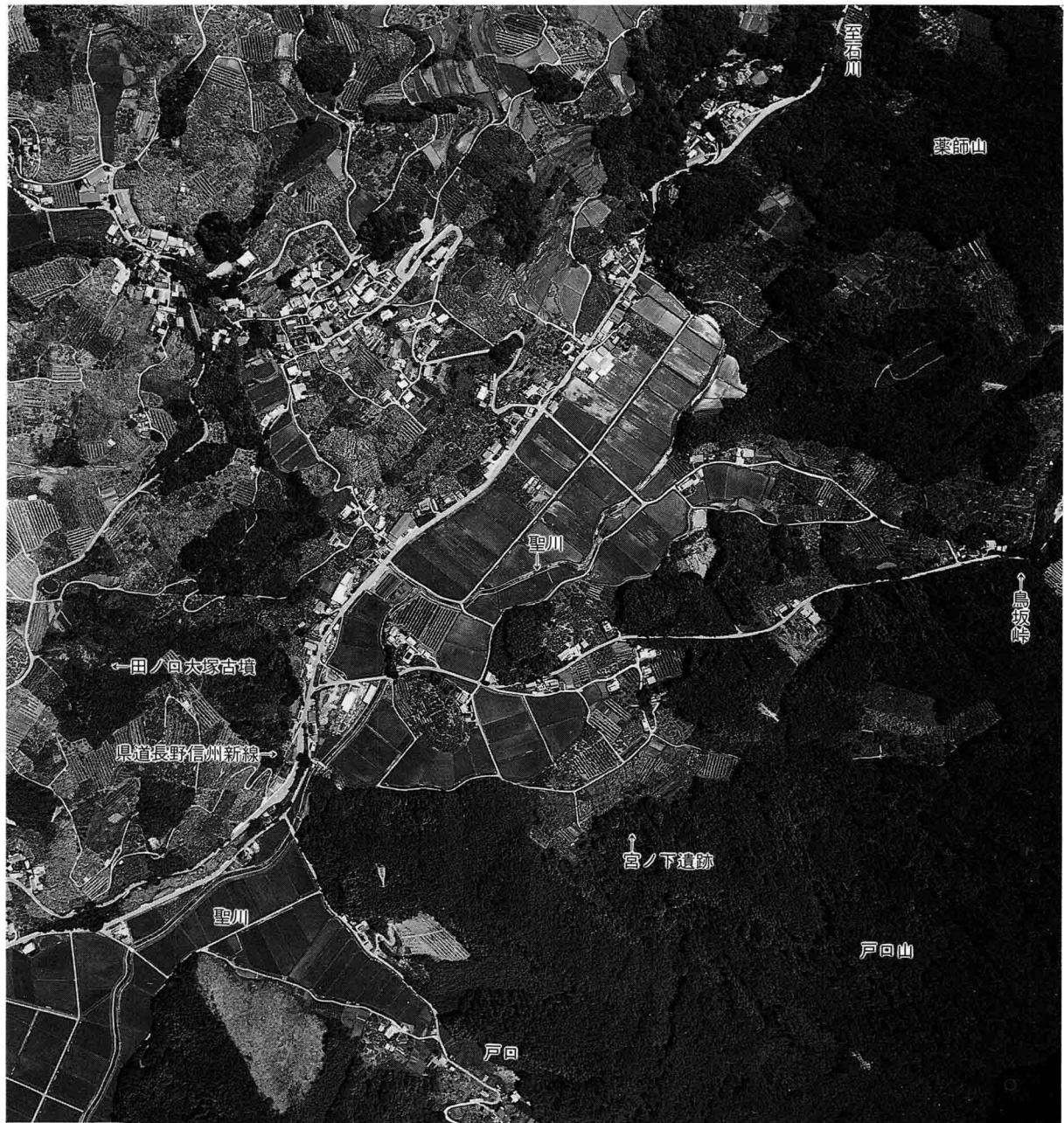
I-1 猪平遺跡周辺の航空写真（約1:4,000）

ているため、遺跡呼称をこれにしようかと考えたが、近世の文書には「井ノ平」「戌平」「犬平」「犬ノ平」があり、本報告書では「イノタイラ」とした。明治の文書での地字は「大字猪ノ平字猪平」という。字名の由来について「井ノ平」を意識して「猪ノ平の本意は泉の湧く井の平なのではないか。井の口、井の頭等はみな泉の出る場所」と説く。

引用・参考文献 『塩崎村史』 塩崎村史刊行会 昭和46年

#### 〔宮ノ下遺跡〕

篠ノ井地籍の千曲川沖積面から宮ノ下への道は、石川から石川坂を登る方法と、塩崎から鳥坂峠越えの二通りある。坂を登る・峠越えと記載されるように千曲川沖積面より比高差150m程の位置に聖川が開析した長さ5km・最大幅0.3kmの帶状沖積地が展開する。これを田野口盆地と呼んでいる。聖川は大岡村と麻績村の境界にそり立つ聖山(1447.6m)を水源として、断層谷を縦貫する小規模河川である。水量はそれ程多くないが、沖積面の上流部では大小の礫の転石が顕著に認められ、相当の暴れ川の様相を呈している。聖川左岸は河岸段丘がみられ、その上に縄文時代後期から古墳時代・古代前半期の遺跡が点在し、現集落も形成される。これに対し右岸は篠山



I-2 宮ノ下遺跡周辺の航空写真（約1：4,000）

から北麓に突出した小尾根を迂回するように流下する特色ある河川である。田野口盆地は石川坂が安山岩であったため、下刻を受けなかったことにより形成されたものと考えられており、荘年期の盆地地形を呈している。遺跡はこの田野口盆地南縁、篠山北支脈薬師山（565.1m）と戸口山（592.6m）との間に位置し、旧聖川迂回流路に接する。地形は篠山山麓に形成された小扇状地と斜面の複合である。山懐で北向き斜面であったので遺跡の存在は期待されていなかった。過年の圃場整備事業での土器の出土を聞き及び、試掘調査を実施した所、大小礫に混入するよう土師器・須恵器の出土を見た。現存する旧来の集落は日当りの良い南斜面にあるのに対し、篠山山麓では戸口、宮ノ下の二つの集落にすぎないことも遺跡存在の有無の意識に強くかかわっていた。遺跡に立ってみると左岸と同様沖積地が眼下にあり、山麓も他と異なり緩傾斜である。薬師山から突出する丘陵が長く伸びるため谷風の影響が少なく、日当りも良い事が判明した。また飲料水等の水も涸れることなく谷筋から流出していることは聖川左岸の遺跡よりも有利な面がうかがえる。

## 2 考古学的環境

千曲川沖積地の西縁部山麓・山頂には弥生時代から平安時代・中世にかけての著名な数多くの遺跡が存在する。田野口盆地の両岸部も規模は小さいがまた然りである。内容的には猪平遺跡・宮ノ下遺跡と現時点では共通する項目が少ないものと思われるが紹介する。

3 大清水遺跡 昭和48年圃場整備事業中に聖川の氾濫原から発見された。東西6.4m・南北4.3mの卵形に白色を呈する多量の灰層が検出された。灰層内からは縄文時代中後半から後・晩期の土器片及び弥生時代後期土器片が出土した。また骨針のほかに日本鹿（5頭）・猪（3頭）・狸・兎・鳥の小骨片があり、それも四足骨で頭骨等は認められない。祭祀的要素をもった継続する一時的キャンプ地と想定している。『箱清水遺跡・大峯遺跡・大清水遺跡』長野市教育委員会 昭和56年

4 鶴前遺跡 昭和63年・平成元年に財團法人長野県埋蔵文化財センターで約11300m<sup>2</sup>が調査された。縄文時代中期から中世の遺構・遺物が確認されている。住居址は縄文2・弥生末～古墳初頭27・古代29・不明3の総計61軒である。『長野県埋蔵文化財センターヤー報5・6』 平成元・2年

5 田ノ口大塚古墳 前方後方墳で全長39m・後方部一辺約25m・高さ4m・前方部長14m・幅9m・高さ2mを測る。内部構造・出土遺物等は不明である。年代は5世紀中葉と考えられている。長野市指定史跡。『新訂長野市の文化財』長野市教育委員会 平成3年

6 姫塚古墳 湯ノ入山頂に構築された前方後方墳である。全長32m・後方部幅17m・長さ19.5m・高さ3.5m・前方部幅7.6m・高さ1.5mの規模である。未発掘古墳であるため内部主体等は不明である。埴輪・葺石は確認されない。川柳將軍塚古墳より新・旧の2説ある。国指定史跡。岩崎卓也「川柳將軍塚古墳・姫塚古墳」『長野県史主要遺跡（北・東信）』昭和57年

7 川柳將軍塚古墳 姫塚古墳の下方山頂に構築された前方後円墳である。全長93m・後円部径45m・高さ10m・前方部幅26m・高さ5mの規模である。寛政年間に盗掘を受け、後円部・前方部に竪穴石室が確認されており、その規模は後円部長さ5.4～7.2m・幅1.8m、前方部長さ2.7mと推定されている。現存している遺物は漢式鏡の異体字日月銘内行花文鏡のほかに仿製鏡5面、筒形銅器、琴柱形石製品、石突形石製品、勾玉、管玉、ガラス小玉、琥珀玉等がある。『信濃奇勝録』では27面の鏡鑑の出土が記載されている。善光寺平の盟主的古墳と考えられており、築造年代を4世紀後葉から5世紀初頭におく。国指定史跡。6と同じ。

8 四ノ宮將軍塚古墳（薬師山1号古墳） 薬師山山頂に構築された径26m・高さ5.6mを測る大型の円墳である。未発掘のため内部主体及び遺物等は不明である。5世紀中葉以降の築造と考えられる。『長野県史遺跡地名表』長野県史刊行会 昭和56年

9 圏内古墳（丸山4号古墳） 薬師山山麓に位置する円墳であるが、老人憩いの家建設の際盛土され、規模等は不明である。内部主体部は横穴石室で、長さ5.1m・幅2mを測る。築造年代は6世紀後半に比定される。奥壁に線刻絵画が描かれる。長野市指定史跡。5と同じ。

10 池の上古墳 薬師山中腹に構築された土石混合古墳である。径約15.5m・高さ4mの規模で、玄室の長さ4.2m・高さ2.3m、羨道の長さ5mの横穴石室を主体部とする。遺物の出土は不明である。6世紀後半に位置づける。長野市指定史跡。5と同じ。

11 中郷神社前方後円墳 千曲川沖積地近くの低丘陵上に立地する前方後円墳である。全長53m、後円部径30m・高さ4.5m、前方部幅24m・高さ3.5mの規模が想定されている。未調査のため内部構造は不明であるが、板



2図 調査地周辺の主要遺跡 (1 : 20,000)

1. 猪平遺跡 2. 宮ノ下遺跡 3. 大清水遺跡 4. 鶴前遺跡 5. 田ノ口大塚古墳 6. 姫塚古墳 7. 川柳將軍塚古墳 8. 四ノ宮將軍塚古墳 9. 囲内(丸山4号)古墳 10. 池の上古墳 11. 中郷神社前方後円墳 12. 鶴萩古墳 13. 越將軍塚古墳 14. 松の山窯址 15. 塩崎城見山砦跡 16. 塩崎城跡 17. 塩崎新城跡

石等の散在から竪穴石室と推定される。2基の陪塚がある。築造は5世紀代後半に比定される。長野市指定史跡。5と同じ。

12 鶴萩古墳 篠山東山麓に位置する土石混合古墳である。径15.5m・高さ2.9mの円墳で、玄室6.7m・高さ2.8m、羨道3.9mの規模の横穴石室を有する。墳丘・内部主体ともほぼ完存する。築造年代を6世紀後半に比定する。長野市指定史跡。5と同じ。

13 越將軍塚古墳 篠山中腹山頂に構築された径33m・高さ6.7mの大型円墳である。内部主体は数次に亘る盜掘を受け破壊が著しいが、長さ6.2m・幅1.45~1.2m・高さ0.9mの竪穴石室が確認されている。外周に幅5.4m・深さ0.55mの溝がめぐる。遺物は滑石製小玉、小鉄片、土師器埴、埴輪片が出土しているにすぎない。築造は5世紀代に比定される。昭和53年清掃発掘調査実施。長野市指定史跡。6と同じ。

14 松ノ山窯址 昭和45年農道拡幅工事により発見され、県内最古の須恵器窯址である。地下式登窯と推定されるが、窯体幅1.6mを確認するのみで、全長等の規模は不明である。甕・甌・短頸壺・坏蓋・手摃土器があるが酸化焰焼成である。6世紀初頭の年代を与える。6と同じ。

15 塩崎城見山砦跡 16世紀の中世山城で、主郭は長軸30m・短軸20m程の規模で楕円形を呈し、幅約4mの土塁が全周する。小規模な城郭である。『長野県埋蔵文化財センター年報8』平成4年

16 塩崎城跡（五万長者城・白助城） 篠ノ井長谷の山頂にあり、30×30mの連郭式の山城である。塩崎氏の居城とされ、築造は室町～戦国時代と考えられている。『長野県の中世城館跡』長野県教育委員会 昭和58年

17 塩崎新城（赤沢城） 篠山支脈の突出した山頂にある。110×18mを測る規模の山城で段郭を有する。赤沢氏の居城で、室町時代の築造と推定されている。昭和63年財長野県埋蔵文化財センターにより西側の一部が発掘調査され、幅3.5m・底幅0.5m・高さ1.3mの溝が確認されている。遺物の多くは15~16世紀に比定されている。4・16と同じ。



I - 3 猪平の湧水地と水神様

## II 調査の経過

### 1 試掘分布調査の経過

昭和63年6月22日付 企画調整部企画課長より関係課長宛「更科カントリークラブ事業計画書」の送付がある。

11月7日付 「昭和64年度開発事業に伴う埋蔵文化財保護について（照会）」を行う。

11月21日付 株式会社更科カントリー代表取締役芝波田政之より、猪平遺跡に関する「埋蔵文化財の保存について（依頼）」がある。

昭和64年1月5日付 「更科カントリー建設事業に伴う猪平遺跡の保護措置について（通知）」送付する。合せて発掘調査計画書・予算書を提示する。保護対象面積32000m<sup>2</sup>・調査費19,600千円を予定。

平成元年8月10日付 (株)更科カントリーより更科カントリークラブ造成予定地内の埋蔵文化財の発掘調査及び分布調査を委託する旨の「埋蔵文化財の保存について（依頼）」がある。

8月17日 長野県教育委員会文化課・長野市埋蔵文化財センター・(株)更科カントリーの三者による現地協議を実施する。猪平遺跡の範囲の推定と開発事業地内の試掘を伴う分布調査をまず実施し、本調査への資料を得る必要があることを確認し本年度事業を進めることとした。

8月28日 「埋蔵文化財包蔵地等の分布調査について」の決裁なる。旧石器時代の遺物出土の可能性があるため森嶋稔・森山公一両氏に調査指導員を委嘱する。

9月4日付 「埋蔵文化財分布調査委託契約書」を締結する。実施期日は9月4日～9月14日、事業地面積約115ha、調査費721千円とする。

9月4日～11日 試掘を伴う分布調査を実施する（稼動日5.5日）。詳細は別記。

9月4日付 試掘坑等位置図作成の為、(有)第一測量コンサルタント代表取締役堀茂雄と業務委託請書を締結する。

11月14日付 「試掘分布調査報告書」を長野県教育委員会教育長・(株)更科カントリー宛提出する。



II-1 開発事業地より石川条里遺跡を臨む

## 2 試掘分布調査

更科カントリークラブ造成計画地は、篠ノ井塩崎、信更町赤田地籍のうち約115haに及ぶものでそのほとんどが山林である。わずかに猪平溜池周辺の平坦部に畑・水田・果樹園として開拓され、戸口集落上方の緩斜面に果樹園が、そして宮ノ下地籍の山麓末端付近に畑・果樹園が見られる程度である。ことほどさように、表土が露呈している部分が少なく、踏査による分布採集調査が不可能に近い状況であった。また信更町には平安時代を主体とする須恵器窯址が各地で確認されており、山地の地形からその存在が予想されるため、試掘を伴う分布調査を実施することにした。

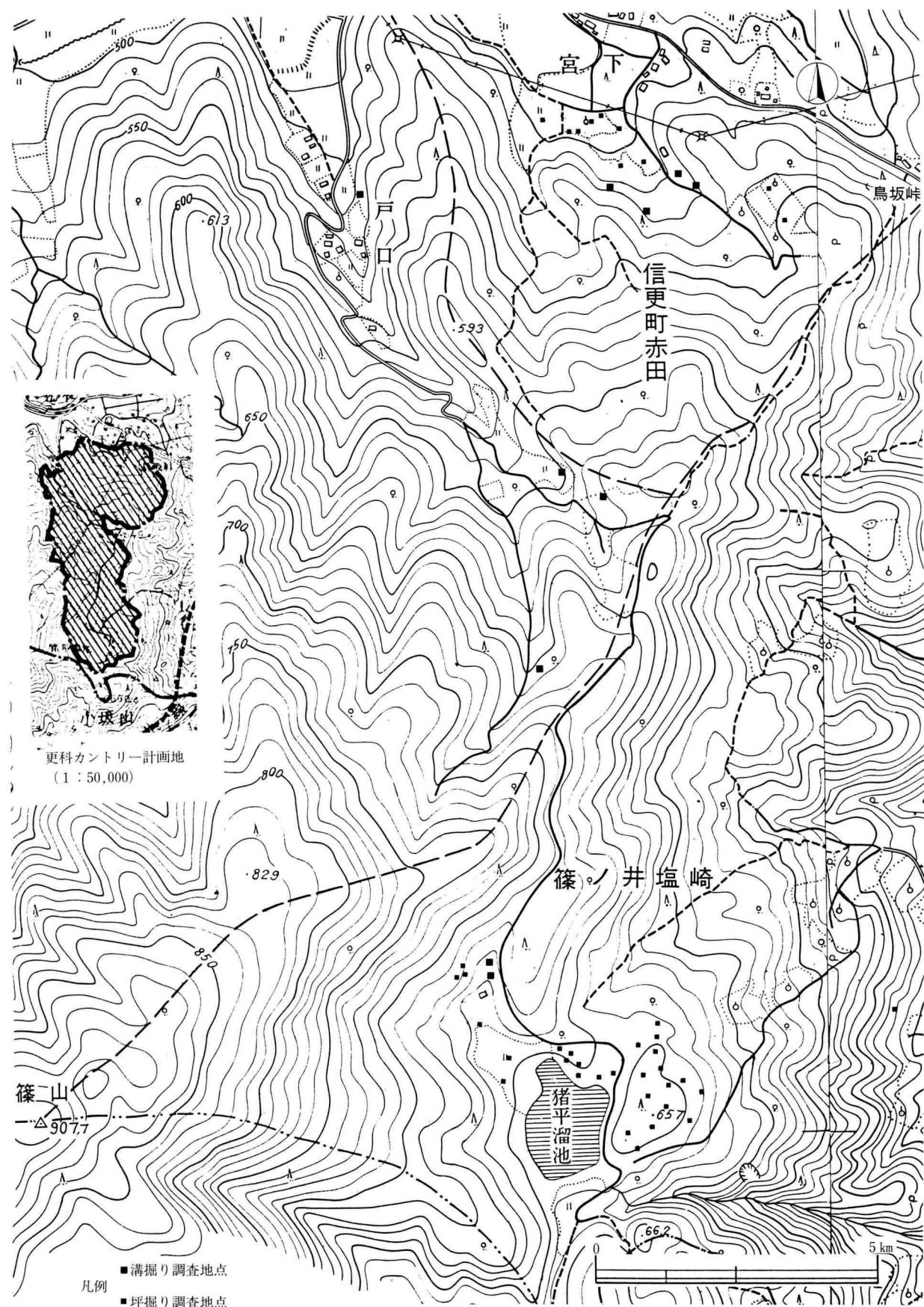
調査の方法は、周知の遺跡においては、範囲の確定を重点にして、任意の地点を選定し坪掘りにより、窯址の存在が予想される地域では等高線に添って溝掘りによって行った。期間は平成元年9月4日から11日にかけて実質5.5日の短期間ではあったが、猪平遺跡周辺に29ヶ所の試掘坑・2ヶ所に試掘溝を、宮ノ下地籍に8ヶ所の試掘坑と4本の試掘溝を、薬師山遺跡と目される地点に2個の試掘坑を、更に戸口集落付近に1本の試掘溝、猪平と宮ノ下地籍の中間付近の湿地部斜面に3ヶ所の試掘溝を入れた。これらは重機等が利用できない場所であったので、すべて手掘り作業を行った。以下調査所見を「更科カントリークラブ造成地内に於る埋蔵文化財の分布調査報告書」より抜粋する。

「1 猪平遺跡 同地居住の宮崎義男氏の表採資料（II-3・4）によれば、縄文時代の打製石鎌・打製石斧・石錐・楔形石器・スクレバー・凹石・磨石・剥片等があり、縄文時代早期以降の遺跡が予想されるが、土器類は認められない。弥生時代の遺物に太形蛤刃石斧・磨製石鎌があり、古墳時代に比定されるものには滑石製勾玉、同管玉がある。土器類では平安時代の須恵器甕片を1点見い出す。中世以降のものに五輪塔の空風輪部がある。遺物量そのものは多くないが、縄文時代から中世の複合遺跡の様相がうかがわれる。」

さて、今回試掘した地点からの所見をみる。遺物が出土したのは、1地点（4図）須恵器甕片・近世陶器片、2地点縄文時代早期土器片・須恵器甕片・土師器坏片・灰釉陶器椀片、5地点縄文時代打製石斧の3地点にすぎ



II-2 40地点試掘調査



3図 更科カントリー計画地内試掘調査位置図 (1 : 10,000)

ない。遺構の存在が予想される試掘坑は、1地点ピット、2地点住居址、4地点土壙状落ち込み、5地点ピット、12地点落ち込み、18地点溝状遺構、22地点段丘端の落ち込みである。

宮崎義男氏の表面採集地点と今回の調査での遺構及び遺物の検出した地点とほぼ重なり、猪平溜池東側の高地(650.7m)から東・北・西へ遺跡の主要部が展開しているようである。遺跡の西端は22地点付近に求められ、北端は7地点付近に、東端は18地点の緩斜面をもって限りとすることができる。ただし、南西部は試掘調査をしていないので不明であるが、地形的に見て遺跡範囲の可能性がある。

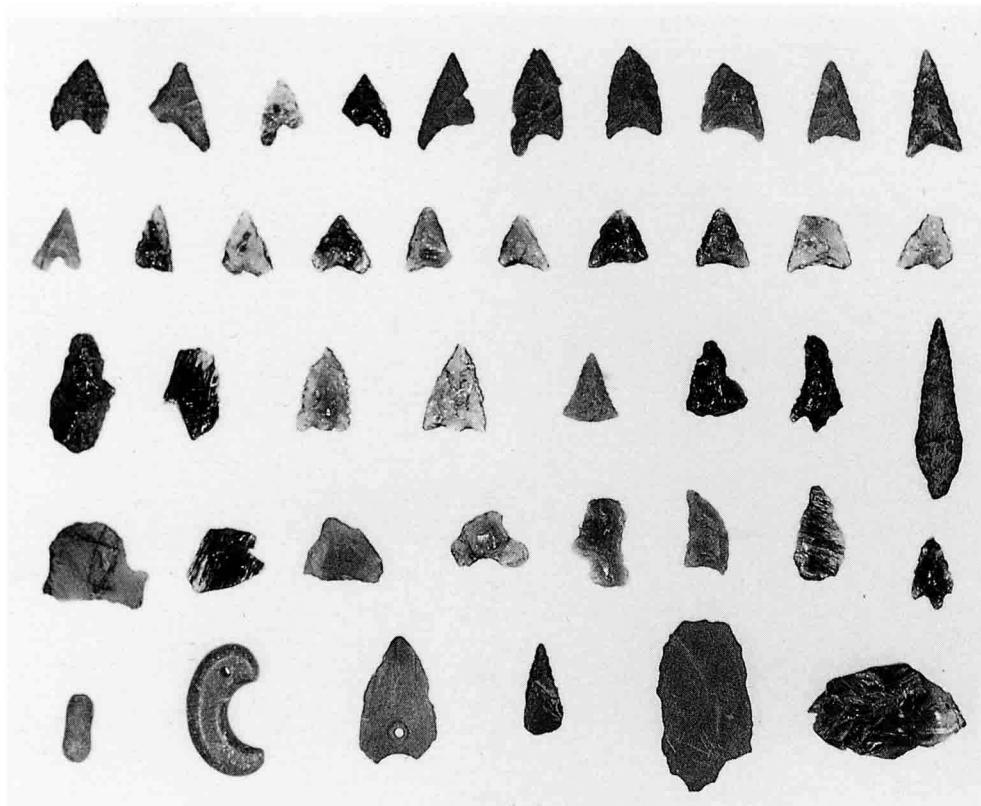
さて、各期の遺物を得ているが、その量は多くない。今回の調査で出土した縄文時代土器は1点にすぎず、集落跡が存在しても極く小規模なものであろう。弥生時代以降も同様な考え方を示している。平安時代の遺構の中心部は特定されない。

2 宮ノ下遺跡 従来の遺跡範囲は、圃場整備事業に伴う出土地点等から、水田面からすぐ上段の果樹園あたりにかけ予想されていた。そのため、本開発事業地からはずれるものと思料されたが、予定地内を踏査したところ、若干ながら平安時代を主体とする土師器・須恵器の小片が採集された。この地点に43~50地点の試掘坑を任意に設定し、遺物の出土状況、包含層の有無等を調査したところ、遺物の出土は若干認められたにすぎず、43~48・50地点に黒褐色粘質土の遺物包含層と推定される土層が存在し、このあたりが遺跡範囲と思料される。ただし、遺構密集度はそれ程高くないであろう。

3 薬師山遺跡 遺跡地図では37・38地点付近に存在するとされるが、試掘等の結果、遺物の出土はもとより包含層等も認められなかった。よってこの地点には遺跡が存在しない。

4 古墳の確認踏査 事業地の山頂及び尾根上を踏査したが、古墳及びその形跡等は確認できなかった。

5 須恵器窯址の確認調査 谷筋の20~30°の傾斜を有し、下方に平坦地・湧水(湿地)がある地点を選定し、標高線に添って約10~20mの試掘溝を入れたが窯址の痕跡は全く認められなかった。



II-3 宮崎義男氏採集石器類

〔遺跡の保護について〕

猪平遺跡は、縄文時代から中世に亘る複合遺跡であり、また山腹平坦地と湿地を背景にして形成されている点、長野市でも特異な遺跡の一つである。そのため、以下の保護措置を講ずる必要がある。

(案の1) 遺跡範囲内を現状のまま保存する。ただし、遺構面までの堆積土が薄いため、大型機械類の搬入・搬出には注意を要する。

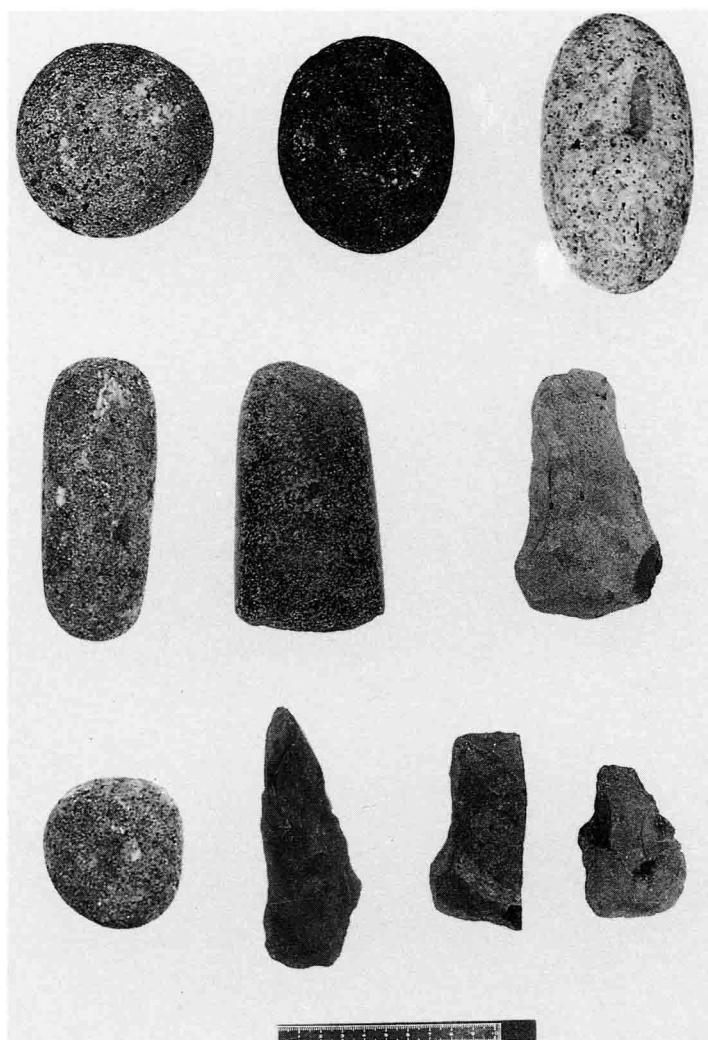
(案の2) 上記が困難な場合、土層堆積が一様でないので、人力による慎重な調査が要求され、開発事業着手前に記録保存をはかる必要がある。

案の2はあくまで次善の策であり、設計変更等による案の1の実施を強く要望する。

宮ノ下遺跡の保護も同様である。尚、遺跡範囲推定面積は次の通りである。猪平遺跡約15000m<sup>2</sup>、宮ノ下遺跡（保護対象地）約5000m<sup>2</sup>。

調査指導員 森嶋 稔・森山公一

調査従事者 風間和男・宮崎秀樹・大矢晃雄・宮崎義男・小林富雄・内海豊・酒井忠幸・野本英雄



II-4 宮崎義男氏採集石器類



II-5 戸口地籍試掘調査

### 3 猪平遺跡周辺の試掘坑所見

基本土層序は、I層表土・II層暗茶褐色砂質土・III層黒褐色砂質土（遺物包含層）・IV層黄褐色粘質土または黄褐色ローム質層（基盤層）である。

1 斜面上に位置し、表土下29cmで基盤層に達する。ピット状の遺構を確認する。須恵器甕片・近世以降の陶器片が出土したが、近世以降の陶器片は耕作による混入と思われる。

2 小丘陵間の平坦部に位置し、I～III層が存在する。I層は16cm、II層が24cmを測る。III層は住居址の覆土と予想される。縄文時代土器片及び平安時代の土師器壺、須恵器甕、灰釉陶器椀片が出土する。（SB6）

3 東緩斜面にあり、表土下27cmに礫の集石が認められる。暗渠状の遺構が予想される。出土遺物はない。

4 北急斜面にあり、表土下22cmで基盤層に達する。隅丸方形的な土壙状掘り込みを確認する。覆土に礫を大量に含む。遺構を検出しなかったので、遺物の出土はない。（SK10）

5 北急斜面に位置し、表土下13cmで基盤層に達する。柱穴状の落ち込みを確認する。打製石斧1点出土した。

6 平坦地形の北端部にある。III層ではなく、表土下34cmで礫混りの基盤層に至る。出土遺物はない。

7 北方向に突出する小規模な丘陵状を呈する。表土下32cmで基盤層になる。明確に識別できなかったが、数cmの遺物包含層と同質の土層が認められたが、遺構・遺物は検出されない。

8 7と同様の地形上にあるが、表土下28cmで基盤層に達し、III層は認められない。遺物は出土はない。

9 丘陵状台地の北端に位置する。表土下32cmで基盤層に達する。III層及び遺物の出土はない。

10 平坦な地形であるが、表土下28cmで角礫を多含する基盤層になる。遺構・遺物は確認されない。

11 猪平溜池北端部に位置し、地表下12cmで湧水を見る。遺物の出土はない。

12 東方向へ緩傾斜する。地表下40cmで基盤層に達する。10cm程の遺物包含層が存在し、土壙状の落ち込みを確認する。遺物の出土はない。本調査では浅いもので土壙形態にならなかった。

13～15 小丘陵南西斜面に位置し、基盤層は黄褐色を呈するローム様土壙である。表土下10～16cmである。

16 小丘陵山頂下に位置し、地表下30cmで基盤層に達し、数cmのIII層がある。遺構・遺物は確認されない。

17 小丘陵山頂にあり、地表下20cmで基盤層に達する。数cmのIII層があるが、遺構・遺物は確認されない。

18 小丘陵山頂下東斜面に位置する。地表下40cmで基盤層に至る。16cm程のIII層がある。溝状の落ち込みを確認したが、規模等は不明である。遺物の出土はない。

19 猪平溜池北端に位置する。地表下40cmで基盤層に達し、数cmのIII層がある。遺構・遺物は確認されない。

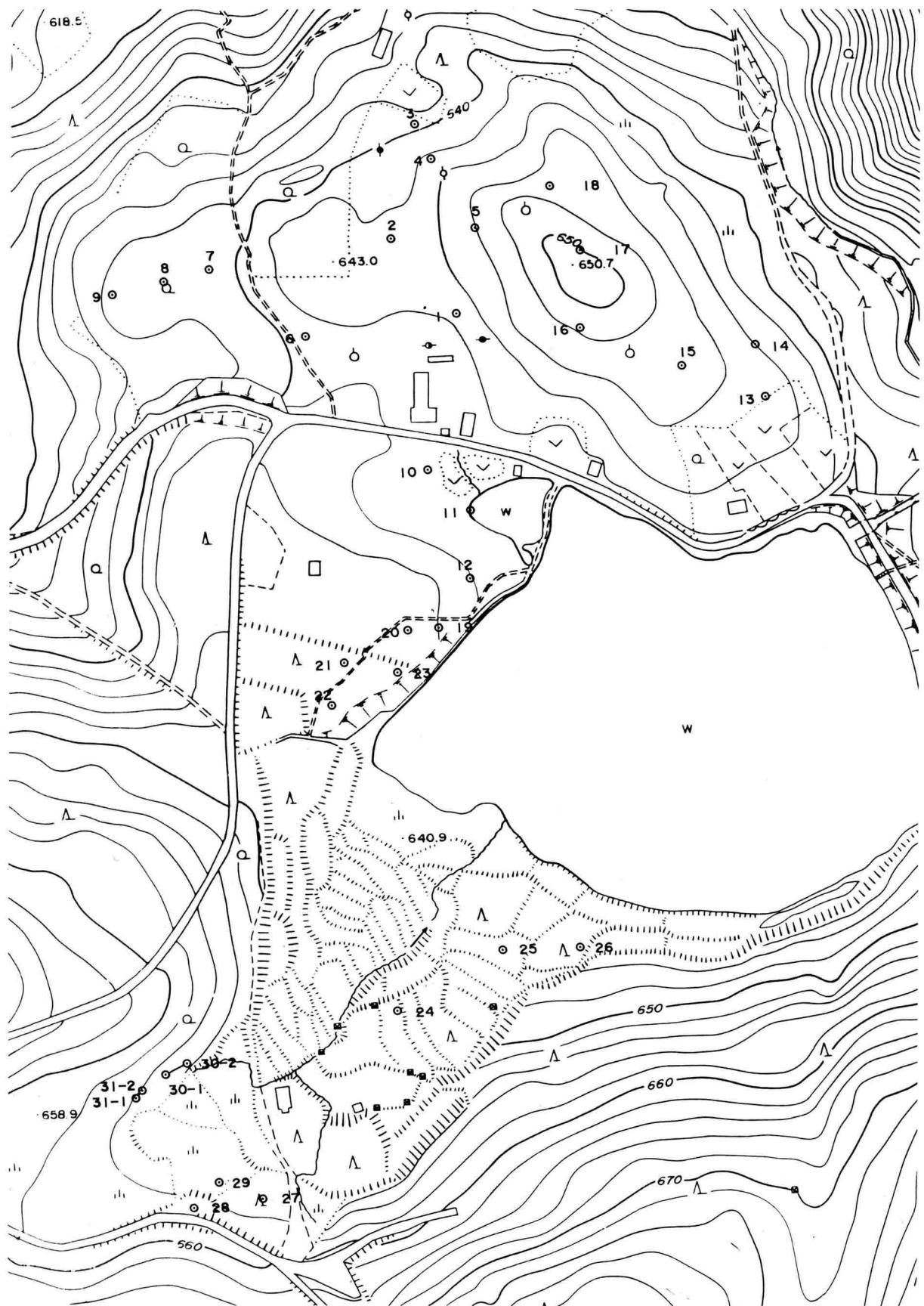
20・21・23 既に削平されており、角礫多含の基盤層が露出する。

22 旧地表に37cmの削平土を盛り、20cmで基盤層に至る。試掘坑南半分は溜池北端の落ち込みになる。遺物の出土はない。

24～26 猪平溜池の北西に位置する。水源流出による扇状地形状を呈し、旧水田である。24は地表下20cmで角礫を多含する茶褐色粘質土の基盤層に達する。25は15cm、26は40cmの深さになる。25は滑石製勾玉・管玉の出土地と推定される地点であるが、遺物包含層はもとより遺構・遺物は検出されない。

27～29 小扇状地の西端、山地山懐部に位置する。山地崩落土によるものか地表下60～70cmの黒褐色粘質土の堆積をみる。基盤層は角礫を多含する黄褐色粘質土になり、湧水を見る。遺構・遺物は確認されない。

30・31 猪平溜池方向へ突出する尾根の西南麓に位置する。須恵器窯址存在確認のため等高線に添ってトレーンチを設定した。焼土等の遺構・遺物は確認されない。



4図 猪平遺跡周辺の試掘調査位置図 (1 : 2,000)

## 4 宮ノ下遺跡周辺の試掘坑所見

基盤層は黄褐色粘質土であるが、谷添・谷筋では大小の角礫を多含するのに対し、戸口山麓では礫を含まない。

I層が暗褐色の耕作土で、II層が黒褐色粘質土（遺物包含層）である。谷筋等の上層にも礫が多混する。

37・38 薬師山遺跡の所在を求めての試掘坑で、薬師山から北西に突出する尾根斜面に位置する。37は地表下33cmで明茶褐色粘質土の基盤層に達する。38は57cmを測る。遺構・遺物の検出がなく、遺物包含層も確認されない。遺跡地点転記の際の誤記であろうか、現在のところ薬師山遺跡の所在は不明である。

39・40 薬師山西麓に、須恵器窯址存在確認のための試掘溝である。地表下20～40cmで基盤層に達する。遺構・遺物は確認されない。

41・42 戸口山東側支脈山麓に設定した須恵器窯址を求めた試掘溝である。遺構・遺物は確認されない。

43 薬師山西側の小扇状地形緩斜面に位置する。地表下52cmで基盤層に達する。14cm程の遺物包含層と同質の土層を確認したが、遺構・遺物は認められない。

44 小扇状地形の中央付近に位置し、地表下65cmで基盤層に至る。遺構・遺物は認められない。

45 43と同地形にあるが、遺物包含層は希薄になる。地表下48cmで基盤層に至る。遺構・遺物は確認されない。

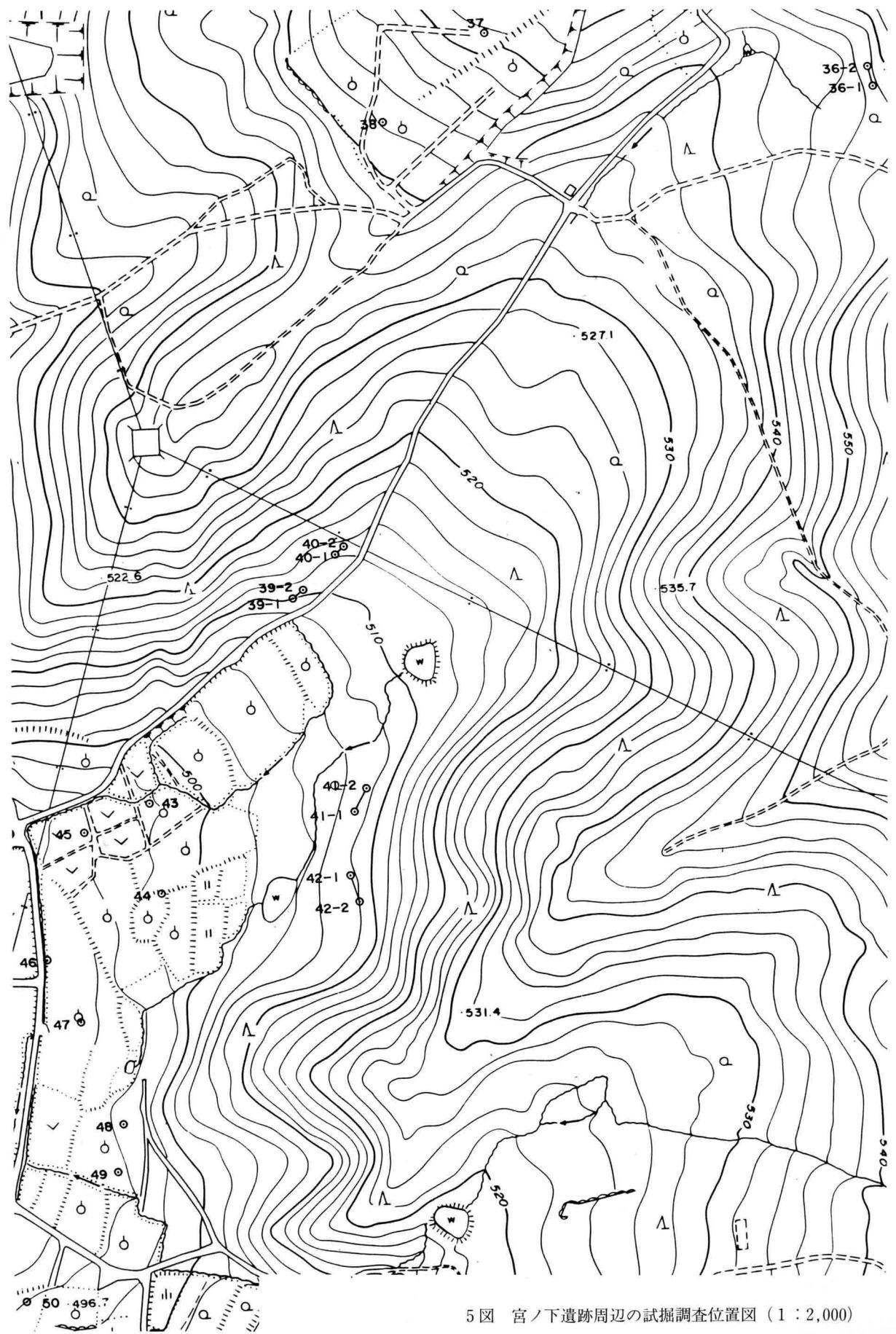
46・47 小扇状地中央、開発事業地末端に位置する。46は表土下70cmで大礫を多含する基盤層に達する。47は40cmである。遺物包含層は46で30cm、47で13cmを測る。共に遺構は確認されないが、土師器壊の少片を得た。

48・49 尾根先端の平坦地に位置する。48は大小角礫を多混する基盤層まで24cm、49は35cmを測る。遺物包含層は48で11cm、49で14cmである。遺物は土師器壊、須恵器壊・甕片がある。遺構は確認されない。

50 戸口山東山麓緩傾斜面に位置する。基盤層まで表土下32cm程で、17cmの遺物包含層がある。遺構はない。



II-6 41地点トレンチ調査



5図 宮ノ下遺跡周辺の試掘調査位置図 (1 : 2,000)

## 5 本調査の経過

平成元年11月18日付 長野県教育委員会教育長より「更科カントリークラブ造成計画地内に係る埋蔵文化財の保護について（通知）」がある。更科カントリークラブ宛「昭和63年6月23日開発行為等調整会議で、意見を付しましたことについては、長野市埋蔵文化財センターの詳細分布調査により、計画地内に下記のとおり遺跡が存在しているとの結果が得られましたので、設計変更等を含めた保護協議をお願いいたします。記 猪平遺跡約15,000m<sup>2</sup>、宮ノ下遺跡約5000m<sup>2</sup>」。これ以降（株）更科カントリー担当者と埋蔵文化財の保護措置・発掘調査時期及び方法等の協議を行うも、「環境影響評価準備書（案）」の検討中であり、実施案については「準備書」の提出を待って行うことにする。また長野市関係部課による内部検討会が進められる。

平成2年10月11日付 「環境影響評価準備書（案）」について以下意見を付して長野市企画課長宛提出する。「戸口遺跡 計画地域外に存在。薬師山遺跡 転記誤載か、分布調査の結果遺跡は存在せず。猪平遺跡 分布調査の結果遺跡範囲15,000m<sup>2</sup>、ゴルフコース開発事業から外す等の処置をとってもらいたい。宮ノ下遺跡 保護対象地約5000m<sup>2</sup>、計画開発地と遺跡推定範囲南限と重なるため、詳細分布調査を必要とする。」

平成3年7月1日付 長野市長より長野県生活環境部長宛に「準備書（案）」の修正意見を提出する。

8月9日付 「環境影響評価準備書（案）」の正案が提出される。

平成3年11月14日付 長野市企画課長経由で、県より「更科カントリークラブ建設事業環境影響評価準備書（案）長野市関係課指摘事項に対する修正案」の送付がある。「猪平遺跡 協議中です。遺跡と確認された範囲は現状保存するのが原則ですが、コースレイアウト上むずかしいため、地形現状の変更となる部分は根のはらない樹木により造成森林を施します。また手をつけない部分については工事中においても工事車両が入らないように配慮いたします。宮ノ下遺跡 協議中です。着工にあたり詳細分布調査を実施します。」

平成4年9月11日付 「環境影響評価書」が提出される。この間に農地法等関係法令の許認可の見通しが出て来た為、開発事業の進捗状況を考慮し、長野県教育委員会文化課の指導により発掘調査を実施すべく準備を進める。

10月2日付 （株）更科カントリーより、文化財保護法第57条の2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘の届出について」の提出がある。10月5日付で埋蔵文化財保護措置の意見を付して長野県教育委員会教育長宛進達する。猪平遺跡（記録保存）・宮ノ下遺跡（詳細分布調査）。

10月7日付 文化財保護法第98条の2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を文化庁長官宛提出する。

10月6日付 「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」・「更科カントリークラブ造成地内の埋蔵文化財に関する協定書」を締結する。履行期間平成4年10月12日～平成5年3月31日、受託料4,656千円。尚更科カントリークラブ造成事業認可が遅れているため、実施にあたっては2年度計画とする。

10月12日～12月15日 発掘調査を実施する（稼動日数46日）

10月14日 (有)写真測図研究所代表取締役杉本幸治と「遺構測量委託契約書」を締結する。

11月24日付 「更科カントリークラブ建設事業に係る環境影響評価書」許可される。

平成5年3月22日付 長野県教育委員会教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」がある。「（株）更科カントリー代表取締役芝波田政之から届出のありました土木工事等については、別紙写のとおり発掘調査を行うこととしたい（略）。別紙写（株）更科カントリー宛（略）文化庁の指導により発掘調査を行うこととされていますので、工事着手前の発掘調査を長野市教育委員へ委託のうえ実施して下さい。（略）」。

4月2日 宮ノ下遺跡の遺物出土状況から遺構の存在が明らかになったので、猪平遺跡を含めた平成5年度の「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結する。履行期間平成5年4月5日～平成6年3月31日、調査費9,807千円・調査面積1,800m<sup>2</sup>以上。

4月5日～5月7日 宮ノ下遺跡発掘調査を実施する。(稼動日数14日)

4月26日～6月2日 猪平遺跡発掘調査を実施する。(稼動日数22日)

4月22日付 「遺構測量業務委託契約書」を有写真測図研究所と締結する。

6月8日付 「発掘調査終了届(通知)」を長野県教育委員会教育長・(株)更科カントリー宛提出する。同日付で「埋蔵文化財の拾得について(届)」「埋蔵文化財の保管証」を長野南警察署長宛に提出する。

6月3日～3月31日 検出遺構等実測図の整図・浄書、出土遺物の洗浄・注記・復元・実測図化・浄書等の整理作業を行う。

3月25日 『猪平遺跡・宮ノ下遺跡』を刊行する。

## 6 調査日誌

### 〔猪平遺跡平成4年度〕

10月1日 (晴) 調査範囲・器材搬入地等を確認のため現地協議を行う。

10月9日 (晴) 発掘調査器材搬入する。

10月12日 (曇) 作業開始。市道より西をA区、東をB区とし、A区の竹林伐栽、草刈り作業を行う。

10月13日 (曇) A区雑木伐栽、小型重機による竹根除去後、B区の草刈り作業を行う。

10月14日 (雨) 作業中止。

10月15日 (雨) 作業中止。

10月16日 (晴) 草刈り作業継続する。A区小型重機・チェーンソーによる雑木伐栽。除去作業に併行してA区西南側グリットを設定する。

10月19日 (曇) 草刈り作業及びグリット設定作業を継続する。

10月20日 (雨) 作業中止。

10月21日 (雨・晴) 草刈り作業後、A区グリットより調査を開始する。グリットナンバーはAC1・AE1・AE6・AG1・AG3・AI2・AI4・AK4である。

10月22日 (晴) 昨日のグリット調査を継続する。遺構が予想されるグリットは、適宜調査範囲を拡張していく。AE1・AF3～4・AH4～5・AK4調査区拡張。ほかAA2・AB3・AD3・AE8・AI6の調査を開始する。

10月23日 (晴) 調査継続。AC4・AC6・AE8の調査を開始する。AF3拡張部より、SB1を検出し調査にかかる。

10月26日 (晴) SB1の調査を継続する。AB7・AC8・AD9の調査を開始する。AC6・AK4の調査区を拡張する。東南側にグリットを設定する。



II-7 10月12日



II-8 10月27日

10月27日（晴） SB1の精査・写真撮影を行う。AB6拡張部から暗渠状配石を検出する。AG10・AI10の調査を開始する。北側の森林内にグリットを設定する。

10月28日（晴） AK4拡張部のSK1～3の調査を開始する。遺物はほとんど出土しない。AI12・AK10・AK12・AL9・AP7・AQ8の調査を開始する。樹木根の除去に困難を極める。暗渠状配石の精査後写真撮影を行う。

10月29日（曇） AN12・AR9・AS8・AT9の調査を開始する。SK1の写真撮影後土層図を作成する。

10月30日（曇） AN10・AO9・AP12・AQ10・AT11・AU10・AV9・AV11・AX9・AX11の調査を始める。SK1～3の精査及び暗渠状配石1～3の実測作業を行う。

11月2日（晴） AP14・AT15の調査を開始する。AT11を拡張する。SK1～3の写真撮影を行う。AJライン土層断面図を作成する。

11月4日（晴） AT17・AV15・AV17・AX15・AX17・AZ15・BA13の調査を開始する。

11月5日（晴） AP16・19・AR14・16・19・AT19・AV19・AX19・21・AZ17・BB15・BC17・BD15・BE17・BF15・BG17の調査を開始する。

11月6日（曇） AP21・AT21・AV22・AX23・AZ19・22・BB19・BD19・BF19・BK17の調査を開始する。出土遺物は少ない。

11月9日（曇・雨） AP23・AR21・AV24・AX25・27・BB21・BH19の調査を開始する。午後は降雨のため作業を中止する。

11月10日（曇） AR23・AT23・25・AV26・BB23・25・BD21・23・25・BF21・23・BH21・23・25・BJ19の調査を開始する。

11月11日（晴） BF21の周辺を拡張する。AP25・AR25・BJ21の調査を開始する。BB19の土層実測作業を行う。

11月12日（晴） AL14・16・AN14・16・BB27・BD27・BF25の調査を開始する。BF21拡張部分さらに広げ、SK4～7を検出し、調査を開始する。

11月13日（晴） 昨日の調査を継続する。AI14・16・AL18・20・22・24・AN18・20・22・24の調査を開始する。A区南側畠部へグリット設定する。

11月16日（晴） 柱穴群1中央のベルトの土層図作成後除去作業を行う。暗渠状遺構4の検出を続ける。AJ18・20・22・24の調査を開始する。

11月17日（晴） 柱穴群1等の精査後写真撮影を行う。BG17から焼土・遺物が確認され、住居址の可能性が高いため周辺グリットを



II-9 11月2日



II-10 11月11日



II-11 11月12日



II-12 11月25日

順次拡張する。AE14・16・AG12・14・16・AH18・20・22・24の調査を開始する。

11月18日（晴） BG17の拡張部からSB 2を検出し調査にかかる。暗渠状遺構4の調査を継続する。AE18・AG19・21の調査を開始する。

11月19日（晴） BG17・AH22・AN16より柱穴が確認され周辺部全域を拡張する（柱穴群2）。SB 2・暗渠状遺構4の調査を継続する。B区のグリット設定作業を行う。

11月20日（曇・雨） 昨日の調査を継続する。午後は降雨にて作業を中止する。

11月24日（晴） SB 2・暗渠状遺構の調査継続と柱穴群2の拡張作業を続ける。B区グリット設定作業を継続する。

11月25日（晴） SB 2を完掘し写真撮影を行う。AA23・24・AB18・AC16・19・21の調査を実施するも湧水を見る。

11月26日（晴） AA19・AC14、B区のAB85・AD84・86・AF88・AJ86・88・90・AK87の調査を開始する。暗渠状遺構4の写真撮影を行う。

11月27日（晴） 柱穴群2の清掃後写真撮影を行う。B区の籠蔽除去作業を行う。遺構測量を実施する。

11月30日（晴） AD86周辺に住居址（SB 3）を確認し、周辺グリットを拡張する。AD80・82・AF80・82・84・AH82・84・86・AJ84・AL86・88・90・AN86・88・90・AP88の調査を開始する。遺構測量を継続し、遺構図結線作業を行う。

12月1日（曇） SB 3の検出作業を継続する。AH80・AJ82・AL82・84・AN84・AP84・AT86の調査を開始する。

12月2日（曇） AJ80・AL80・AN80・AP80・82・AR80・82・84・AT80・82・84の調査を開始する。SB 3のプラン確認を急ぐ。遺構結線を行う。

12月3日（晴） SB 3、SK 8・9及びAE78・AF76・AG78・AH76・AI78・AK78・AP78・AR78・AT76・78の調査を開始する。AD80周辺からSB 4、SK10を検出する。

12月4日（曇） SB 3、SK 8・9の完掘後写真撮影を行う。SB 4、SK10及びAJ76・AL76・AN77・AR74・76・AT72・74の調査を開始する。

12月7日（曇） SB 4は2条の暗渠状遺構と重複関係にある。SK10と写真撮影を行う。SB 4周辺グリットの拡張作業を実施する。

12月8日（雨） 作業中止。

12月9日（晴） SB 4の調査を継続する。AT74からSB 5を確認し検出作業にかかる。

12月10日（晴） SB 4の完掘後写真撮影を行う。SB 5のプランを追求する。SB 3カマドの実測作業を行う。

12月11日（晴） SB 5の周辺を拡張する。AN70・72・74の調査を開始する。SB 4カマドの実測を行う。

12月14日（晴） SB 5の精査後写真撮影を行う。周辺に柱穴群が認められ全面的に拡張する。

12月15日（雪・晴） 降雪10cm程ある。遺構保護策を施こし、器材を撤収し、本年度の発掘作業を終了する。



II-13 12月4日



II-14 12月4日

〔平成5年度〕

4月23日（晴） 補充調査用器材を搬入整備する。

4月26日（晴） 本日より調査を再開する。SB5周辺の拡張作業の継続とAH72・AJ72・AL72の調査を開始する。

4月27日（晴） SB5の南にSB6を検出し調査にかかる。AH70・AJ60・62・64・66・68・70・AL64・66・68・70・AN64・66・AP64・66・AR64・66の調査を開始する。

4月28日（曇） SB6の調査を継続する。AL62・AN60・62・AP62の調査を開始する。柱穴群を西側に追求拡張したところSB7～9を確認する。遺構測量を行う。

4月30日（曇） SB5・6の完掘後写真撮影を行う。SB7～9のプランを追求する。

5月6日（晴） 前日の作業を継続する。SB5・6のカマド細部実測を行う。

5月7日（晴） SB7～9及びAN56・58・AT58の調査を開始する。

5月10日（雨） 作業中止。

5月11日（晴） SB7～9の調査を継続し、AL52・54・56・58・AN54・AP54・56・AR54・56・AT54の調査を開始する。遺構結線作業を行う。

5月12日（晴） SB7・8の精査後写真撮影を行う。SB9は北壁の一部のみ残存する。AN54周辺にSB12を確認し拡張作業にかかる。AN50・52・AT56・60・AV54・58・AX54の調査を開始する。

5月13日（曇） SK11・12の写真撮影を行う。SB12及びAH52・AJ50・52・AL48・50・AP47・49・51・AR49・51・AT50・AV50・AZ56・BB56・BD56の調査を開始する。SB7のカマド細部実測を行う。

5月14日（雨） 作業中止。

5月17日（曇） SB12の完掘後写真撮影、カマド細部実測を行う。AH54・AJ54・56・AZ54・BB54・BF54・BH54・56の調査を開始する。遺構測量を行う。

5月18日（晴） AH50からSB10を確認し周辺を拡張する。AJ46・48・AL46・AN44・46・48・AR45・47・AT44・46・48・AV44・46・48・BD50・52・BF50・52の調査を開始する。SB10のカマド細部実測を行う。

5月19日（晴） BB52よりSB11を確認しプランを追求する。AL44・AP45・AR43・AX42・44・46・48・AZ42・44・46・BA43・45・47・BB44・BC48・BE48の調査を開始する。遺構測量・遺構結線作業を行う。



II-15 4月26日



II-16 5月11日



II-17 5月13日



II-18 5月13日

5月20日（晴） SB10・11を完掘し写真撮影を行う。AJ42・44・AL40・42・AN40・42・AP40・42・AR40・AT40・AV40・AX40・AZ40の調査を開始する。遺構図の結線をする。

5月21日（晴） AL38・AN34・36・38・AP34・36・38・AR36・38・AT34・36・38・AV36・38・AX36・38・AZ38の調査を開始する。遺構図結線作業を行う。

5月24日（晴） AA44・AB46・AD44・AF44・AG43・AH44・46の調査を開始する。AH50周辺に柱穴群4、土壙（SK14・15）が確認され拡張する。

5月25日（晴） 柱穴群4、SK14・15及びAL34・36・AN32・AP32・AR32・34・AV34・AA42・AB40・42・44の調査を開始する。

5月26日（晴） AB36・AC35・AN30・AT32・AV32・AX32・34・AV60の調査を開始する。

5月27日（晴） 柱穴群4、SK14・15の調査を継続し、AL32の調査を開始する。

5月28日（晴） 五輪塔出土地AB36～38の調査をするも遺構なし。SK13～15の精査後写真撮影を行う。SB5鍛冶炉を取り上げる。

5月29日（晴） 遺構測量を行う。

6月2日（曇） グリット調査を完了し、農業用機材搬入路の埋め戻し作業を行い現地に於る発掘作業は全て完了する。遺構図結線を行う。

#### 〔宮ノ下遺跡平成4年度〕

12月14日（晴） 開発予定地（調節池）堰堤に添ってトレンチを設定し調査を開始する。

12月15日（晴） 昨夜の降雪10cm程ある。トレンチからの出土遺物多く、住居址状の落ち込みを確認する。

#### 〔平成5年度〕

4月5日（曇） 草刈り、雑木等の除去作業を実施後、F1～5・G1～5、H1～3の調査を開始する。農道の西をA区、東をB区とする。

4月6日（晴） H4・5・I1～5・J1～5・K1～7の調査を開始する。出土遺物の多いF5・H2を拡張するも遺構なし。

4月7日（曇） K8～10、L1・2の調査を開始する。R1・2に住居址（BSB1）を、K3・8に落ち込みが認められ周辺を拡張する。

4月8日（晴） 昨日の作業を継続する。L3～7及びBSB1の調査を開始する。

4月9日（晴） K5～7に柱穴群・ASK1を検出する。L9・10（ASB1）、R4・5（BSK1）を確認し、プラン追求のため周辺グリットを拡張する。

4月12日（晴） 昨日の調査を継続する。L11・12・M1～11の



II-19 5月18日



II-20 5月20日



II-21 12月14日

調査を開始する。ASK 1 の写真撮影を行う。

4月13日（晴） K 8 (ASD 1)、L 7 (ASB 2) を確認後周辺を拡張する。ASB 1～3、ASK 2～4、BSK 1 の調査を開始する。

4月14日（晴） 昨日の調査を継続する。新たにBSB 2 の調査を開始する。

4月15日（晴） 昨日の調査を継続する。BSB 1・2、BSK 1 の精査後写真撮影を行う。

4月16日（晴） S 3～6・T 1～5 の調査を開始し、T 4・5 に住居址（BSB 3）を確認する。ASK 3 の精査後写真撮影を行う。

4月19日（晴） ASB 4～6 及びO 1・2 の調査を開始する。ASB 4、ASK 4、BSB 3 の完掘後写真撮影を行う。

4月20日（晴） ASB 4 の精査後写真撮影を行う。ASB 6 及びP 1～6 の調査を開始する。

4月21日（晴） ASB 1～3・5 の精査後写真撮影を行う。U 4～6・V 1～3 の調査を開始する。ASB 4 のカマド、ASB 6 の配石の実測を行う。

4月22日（曇） ASB 6、SD 1 の完掘後写真撮影を行う。U 4～6・V 1～9 の調査を開始する。

4月23日（晴） V 2～6 からの遺物の出土が多いが、遺構は認められない。本日で現地に於る発掘作業を終了する。

4月26日（晴） A区の遺構測量作業を行う。

4月27日（晴） 遺構図の結線作業を行う。

4月28日（晴） B区の遺構測量作業を行う。

5月 7 日（晴） 遺構図の結線作業を行う。



II-22 4月5日



II-23 4月12日



II-24 4月19日



II-25 4月21日

## 7 調査の体制

(財)長野県埋蔵文化財センターに係わる上信越自動車道・北陸新幹線対応地を除き、長野市内における緊急発掘調査は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターの直轄事業として実施し、猪平遺跡・宮ノ下遺跡発掘調査における組織・業務分担は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会教育長	奥村秀雄（～平成4年3月）　滝沢忠男
総括管理者	長野市埋蔵文化財センター所長	小山 正（平成4年度）　荒井和雄
庶務係	所長補佐兼庶務係長	山中武徳（契約・予算・決算等出納事務管理）
"	職 員	青木厚子（出納事務・庶務）
調査係	係長（平成4年度）	矢口忠良（発掘調査指揮・報告書作成）
	所長補佐兼調査係長（平成5年度）	
"	主 査	青木和明
"	主 事	千野 浩（発掘調査指揮）
"	"	飯島哲也
"	専 門 員	中殿章子
"	"	横山かよ子
"	" (調査員)	笠井敦子（遺構図整図・浄書・カマド実測・遺構遺物写真）
"	"	山田美弥子
"	" ( " )	寺島孝典
"	"	西沢真弓



II-26 平成4年度参加者

調査係 専門主事 小松安和（平成4年度）  
 　　〃 羽場卓雄（遺物注記・復元）  
 　　〃（〃） 太田重成（〃・〃）  
 　　〃 清水 武（〃・〃・平成5年度）

調査從事者 石川磯美・酒井文夫・池田賢二・小林利男・丸山清・風間小雪・高橋清子・荒井忠・山岸貞義・宮崎龍子・橋爪孝次・小林富雄・鎌田重喜・宮崎義男・関崎文子・土信田敦子・村松正子・多城恵子・西沢幸重（以上平成4年度）  
 　　石川磯美・酒井文夫・池田賢二・小林利男・丸山清・風間小雪・高橋清子・荒井忠・山岸貞義・宮崎龍子・橋爪孝次・小林富雄・鎌田重喜・宮崎義男・関崎文子・村松正子・多城恵子・宮崎正直・宮崎勝夫・北沢きよ江・富田恵子・跡部幸子・唐木ちとせ・永井照子・大矢国子・田中はま江・田中むつ子・曾根川好武・宮崎正美・田中衛・小林行雄（以上平成5年度）

特別調査員 綿田弘美（縄文時代遺物分析・原稿執筆）

整理調査員 青木善子（遺構図作成）・矢口栄子（遺物実測・作成・版組）・小林和子（遺物実測）

整理從事者 小泉ひろ美・武藤信子・池田見紀・徳成奈於子・岡沢治子・向山純子・西尾千枝

遺構測量委託 ㈲写真測図研究所

以上の方々の他に、長野県教育委員会文化課埋蔵文化財係長丸山敏一郎・同指導主事百瀬新治両氏には何かとご指導いただいた。また株式会社カントリー・前田建設(株)の皆様には多大なご援助をいただいた。特に窓口となつてご協力いただいた中沢輝行・鎌田重喜各氏、発掘調査に際しては小林富雄氏、地権者の宮崎義男氏からも多大なるご支援をいただいた。記して感謝申し上げます。



II-27 平成5年度参加者

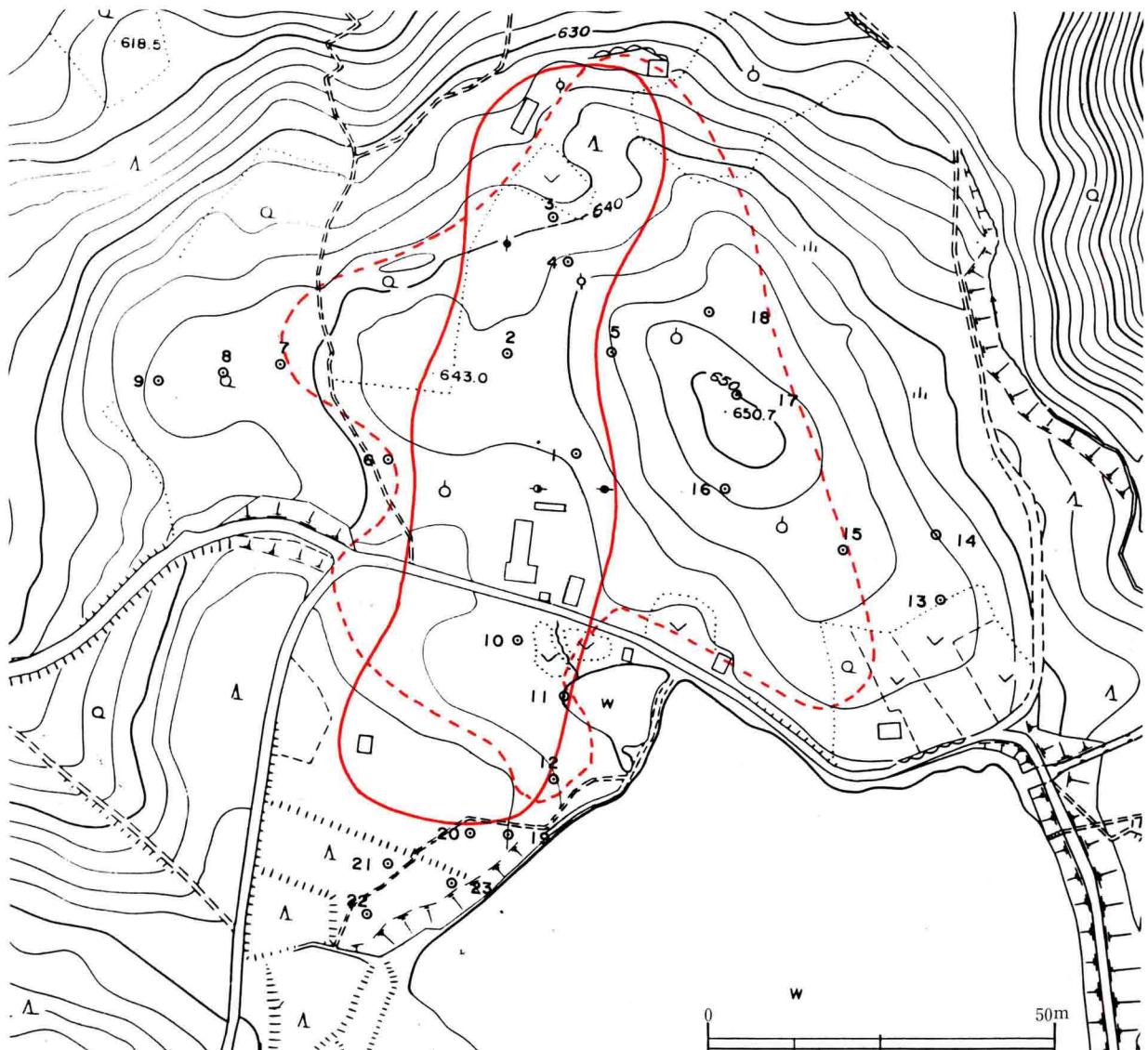
# 猪平遺跡

### III 調査 (猪平遺跡)

#### 1 調査地と地形

猪平溜池の東側に、満水時の水面より比高10m程の小高い独立した丘陵（標高650.7m）があり、山頂より西及び東は急傾斜をもって標高を減する。北側は比高7m程で、平坦もしくは東へ緩傾斜する地形になる。6図では標高643m付近に平坦地を読み取れるが、1mに満たない比高の高まりがあり、この部分は現在産業廃棄物処理用の大穴が4個掘られており、その掘削土により小山を形成している。丘陵南は緩傾斜で溜池に達し、南西部は東方向へ緩傾斜した後、浅い窪地を形成し、更に東へ傾斜を強める。ただし、南西部の南は近時の開発により削平された為に平坦化し、基盤層が露出している。

猪平遺跡の範囲は、試掘所見及び地形の展開等を考慮して、標高650.7mの丘陵山頂付近の北、東は急緩斜面の



6図 開発予定地（実線）及び遺跡範囲推定（点線）図（1：2,000）

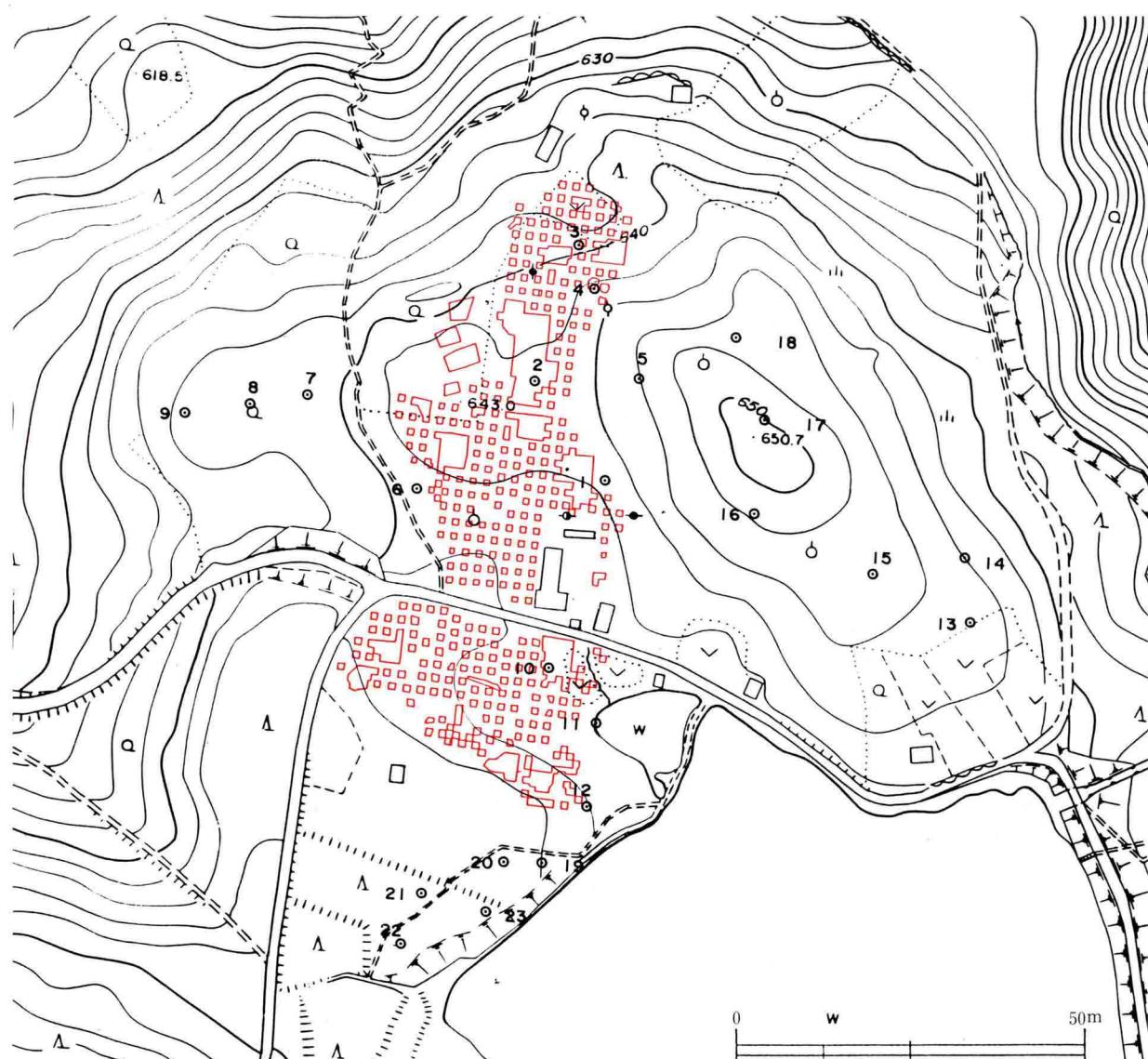
変換地標高634mに求め、北は低丘陵状に突出する標高641m付近に、南は標高642mの既開発事業地の境をもつてする。遺跡推定面積を32,000m<sup>2</sup>と想定する（6図）。

猪平溜池は延宝7年（1679）に築造されたことは前に記した。これ以前の地形について記録は残されていないが、溜池堰堤部は深いV字谷になっており、これに近い地形を予想させる。南西部の小扇状地形からはそれ程のV字谷を思わせないが、遺跡南端は高い段丘状崖錐地形になる。人工の切り崩しによるものと思料させ、V字谷を埋めた可能性がある。古代においては、湿地化した部位と沢が形成されていたものと推察しておきたい。

遺跡の立地は、篠山山系で唯一の平坦地であり、日当りが良く、台風等の南風を小丘陵が防ぎ、北風も立木等で遮断することができ、更に近くに湿地を有する沢が存在することは原始・古代及び現代を通じ生活の場として適地であったことを窺がわせる。

## 2 グリットの配置

発掘調査は、このような遺跡環境の中で、更科カントリークラブ13番ホール建設事業により破壊が懸念される



7図 地形及びグリット配置図（1：2,000）

部分を対象に実施し、市道・現存家屋敷地・立木等を除く、調査が可能な位置に $2 \times 2$ mのグリットを開発行為主軸線に添って設定した。大型重機の搬入路がないので、全て表土層からの手掘りによりグリットを1個間隔を原則として調査を進め、遺構が確認されたグリットを拡張し、全容を露呈した(7図)。保護対象面積は約15,000m<sup>2</sup>である。



III-1 猪平遺跡遠影



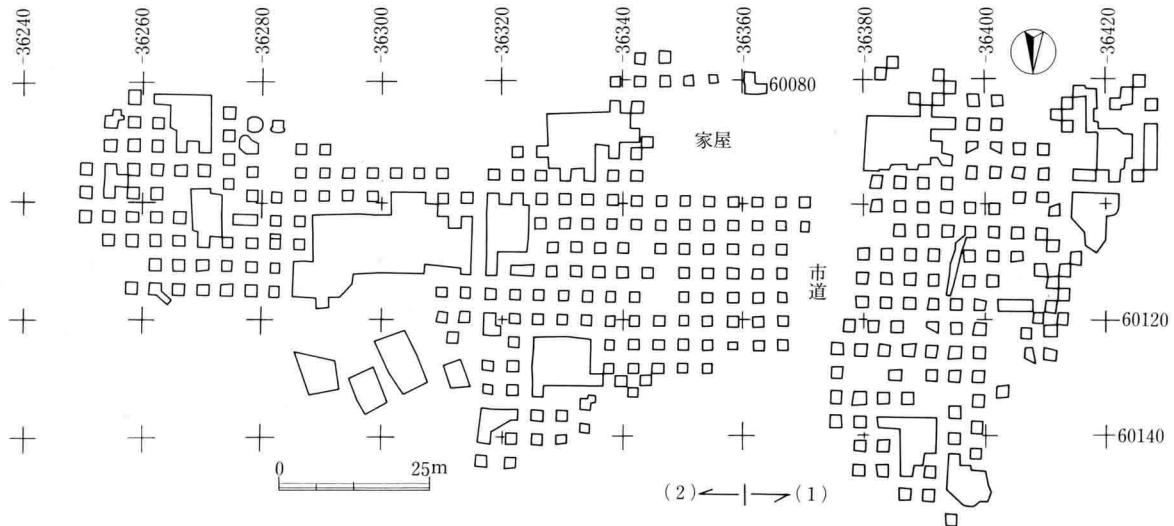
III-2 調査地西端東斜面近影



III-3 調査地東側近影（調査前）



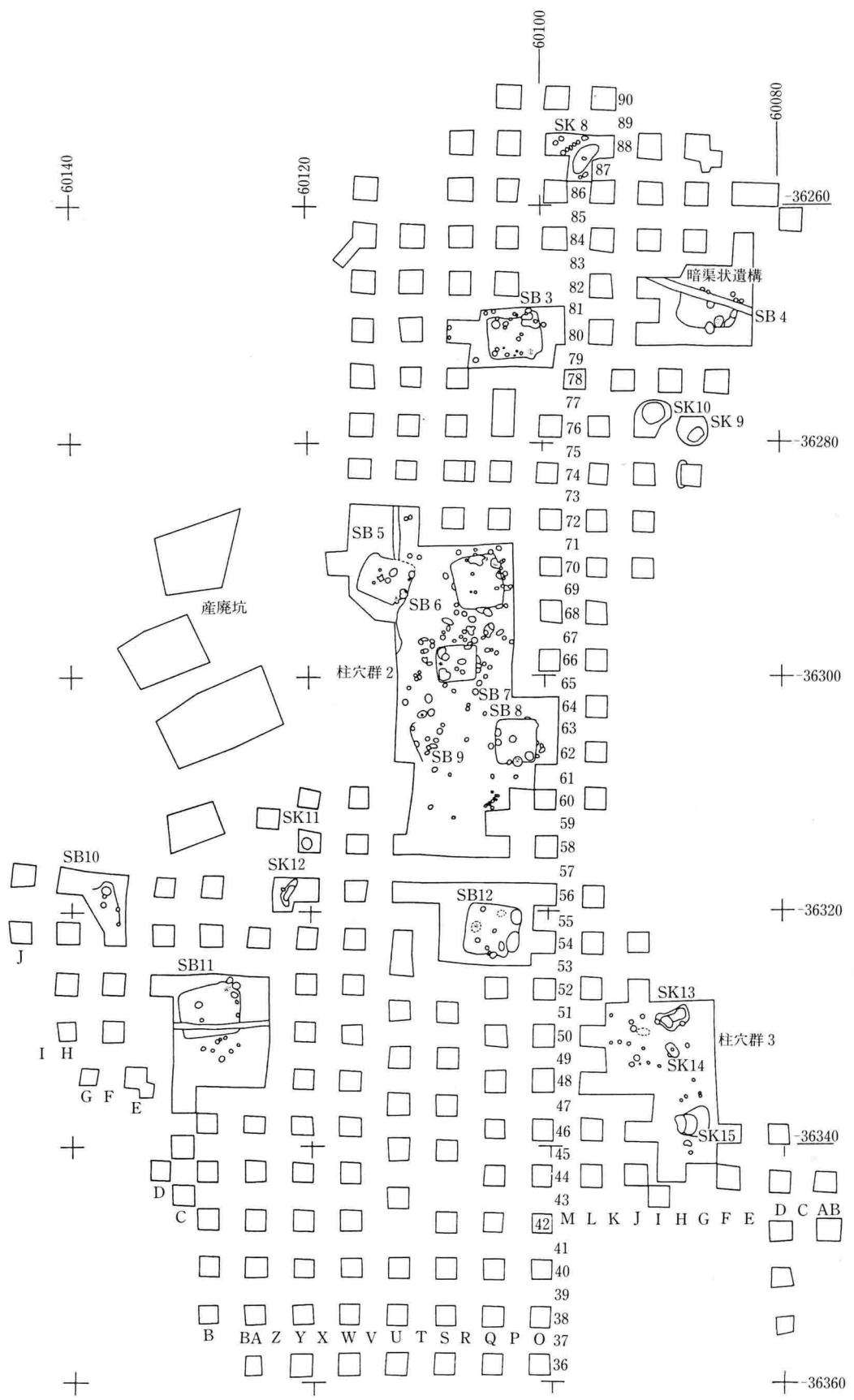
III-4 調査地東側近影（調査後）



8図 グリット配置図 (1 : 1,250)



9図 遺構分布図(1) (1 : 500)



10図 遺構分布図(2) (1 : 500)

### 3 遺構の分布

宮崎義男氏所蔵の猪平遺跡表採品に縄文時代の遺物に目が行き、小規模ながらも該期の集落址が予想されていた。故荒井藤四郎氏採集品の中には土器片があったと聞くが、宮崎氏の所蔵品には1点もないことから疑問視される向きもあった。ことほどさように今回の調査では、住居址の検出は1軒もなく、土壙のみを確認したにすぎない。それも集中した検出でなく、分散的な傾向にある。遺跡南端の東側斜面から3基、南西端から平安時代の2号住居址の西壁と重複関係をもって2基、遺跡中央付近北側微高地上に2基、東端の急斜面変換地付近に1基を確認したにすぎない。

弥生時代の遺物に太形蛤刃石斧・磨製石鎌各1点が採集されているが、土器類はない。調査では該期の遺構・遺物の検出は全くなかった。採集品の伐採具・狩猟具としての性格を本遺跡から読み取ることができる。

古墳時代では滑石製勾玉・管玉が猪平遺跡の範囲からはずれてはいるが出土している。試掘調査でその性格等を追求した所であるが、包含層の存在もなく不明な点が多い。ただあえて言求すれば湧水地に近い位置からの出土であり、水靈信仰に関与した遺物と考えられる。調査では遺構・遺物は弥生時代同様全く確認されていない。

平安時代に至って初めて居住地として認定される遺構、住居址が発見される。それも密集された状況ではなく、縄文時代土壙と同様に分散的なものであり、全て単独で検出された。遺跡南端東斜面に1軒、南西緩斜面に1軒及び $2 \times 2$ 間の建物址1棟、遺跡中央の平坦地で住居址3軒及び $2 \times 2$ 間建物址1棟・ピット群・土壙3基、中央付近東緩斜面に住居址4軒及びピット群、東緩斜面端部から住居址2軒がそれぞれ確認されている。

中世の遺物に五輪塔空風輪部が宮崎義男氏の前庭から採集されている。今回の調査でも出土地点の調査を試みたが、他の部位はもとより遺構等は確認できなかった。この他に珠洲焼の擂鉢がグリットから1点出土している。

近世以降、猪平地籍の開拓等の遺構に猪平溜池の北、窪地呈する地形上に掘立柱建物址を1軒検出した。遺跡西側の東緩斜面から数条の暗渠排水様集石、中央付近以東の緩斜面からも同様遺構が確認された。この他、多分該期のものと思われる土壙2基が小丘陵北東斜面に掘り込まれていた。



III-5 遺跡中央付近の遺構の分布

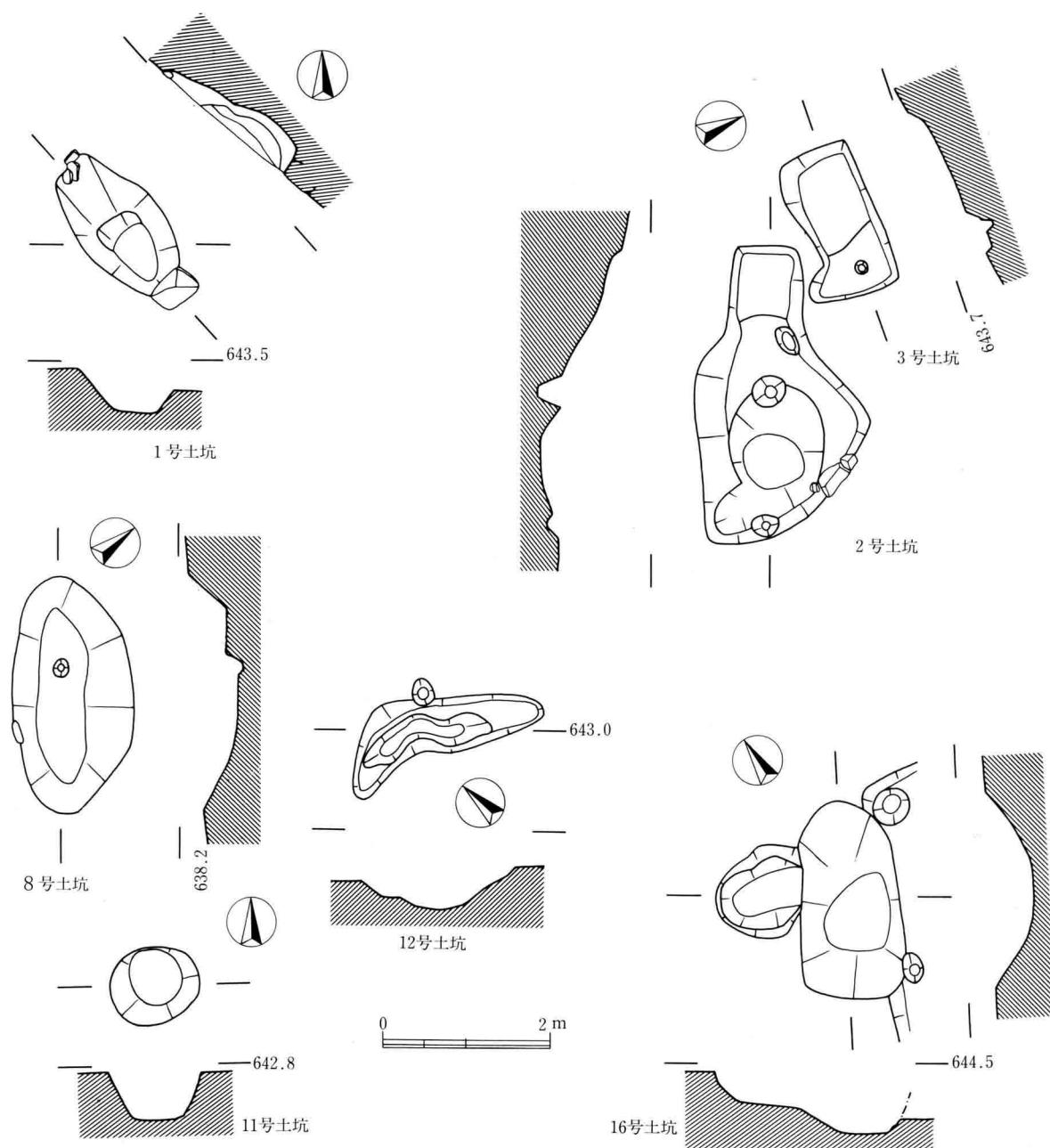
## 4 縄文時代の遺構と遺物

### (1) 遺構

土坑のみ8基を検出したにすぎない。それも無遺物のものが多い。該期の遺構の特色として覆土が茶褐色粘質土を呈する点である。ちなみに平安時代のものは黒褐色砂質土を主体とする。

#### 1号土坑

遺構（11図、III-6） 2号・3号土坑とともに遺跡西端の東緩傾斜地よりの検出である。形態は不整形な偏平楕円形を呈し、主軸方向はN42°Wを指す。長軸1.8m・最大幅1.0m程の規模である。掘り込みは斜面に添って



11図 縄文時代土坑実測図（1：80）

おり、下方ほど深く底面が鍋底状になる。地表面からの深さは34cmを測り、上方表土からは60cm程になる。覆土は3層確認でき、上層のI層は炭化物を多く含む黒褐色粘質土、II層が暗褐色粘質土、III層が茶褐色粘質土、基盤層は小角礫混りの黄褐色粘質土である。猪平溜池の近辺にあたるため狩猟用の落し穴を想定していたが、そうでもなさそうである。遺物の出土はない。

### 2号土坑

遺構（11図、III-7） 調査地西端に位置する遺構で、1号・2号土坑と近接する。形態は不整形を呈し、地形傾斜に添って掘り込まれ、下方は底面が橢円形状を呈し、鍋底状になる。上方表土からの深さは1m程になる。長軸方向はN65°Wを指す。覆土は茶褐色粘質土で同時掘削の遺構と考えられる。柱穴様ピットが3個検出され、そのうち2個は下方の橢円形状掘り込みの外周部にあり、直径30cm程のものである。用途は不明である。

遺物（13図19・20） 覆土中から2点出土したにすぎない。前期後葉に比定される。

### 3号土坑

遺構（11図、III-7） 2号土坑の北側に近接する。形態は不整長方形を呈する。主軸方向はN79°Wを指し、長軸1.8m・最大幅1.1mの規模になる。掘り込みは浅く上方表土から最大30cmを測る。遺構内下方に直径15cm・深さ12cm程のピット1個がある。用途は不明である。遺物の出土はないが、2号土坑と同時期のものと思われる。

### 8号土坑

遺構（11図、III-8） 調査地東端の東斜面の地形変換点付近に位置する。形態は不整橢円形を呈し、長軸2.8m・最大幅1.42mの規模である。掘り込みは傾斜を有し、底面が鍋底状を呈し、深さは60cm程である。主軸方向はN53°Wを指す。底面中央付近に直径20cm・深さ20cmのピットがある。落し穴遺構にみら



III-6 1号土坑



III-7 2号・3号土坑



III-8 8号土坑



III-9 11号土坑

れる逆木の痕跡とも思えるが遺構の形態等から考えて断定することは困難である。周辺のピット列は近時における農耕によるものである。

遺物（13図5・33） 土坑内からは押型文土器と前期後葉の土器が各1片出土した。周辺から押型文土器が2点出土している。

#### 11号土坑

遺構（11図、III-9） 調査地中央の北微高上から検出された。形態は円形を呈し、直径1.1m程・深さ58cmの規模になる。底面は鍋底状を呈し軟弱である。覆土に若干の炭火物の混入が認められたが遺物の出土はない。

#### 12号土坑

遺構（11図、III-10） 11号土坑の東2mに近接する遺構である。形態は不整形な三ヶ月状を呈する。長軸は2.25mの規模になる。掘り込みは2段になり、表土上面からの深さが上段で20cm、下段で38cmになる。底面は鍋底状になる。

遺物 繩文前期の半截竹管文土器片1点が出土したにすぎない。

#### 16号土坑

遺構（11図、III-11・19） 調査地西南端の位置から平安時代の2号住居址と重複関係をもって検出された。形態は不整橢円形を呈するもので、恐らく2基の土坑が重複関係にあるものと考えられる。覆土は同質の茶褐色粘質土である。大形のものは長軸2.35m・短軸1.2mの規模で、掘り込みが鍋底状を呈し、深さ54cmを測る。主軸方向はN31°Eを指す。小形のものは長軸N79°W方向にあるが規模は不明である。短軸最大幅1.1m・深さ40cm程度を測る。底面は東方向に若干傾斜する。共に遺物等は確認されない。



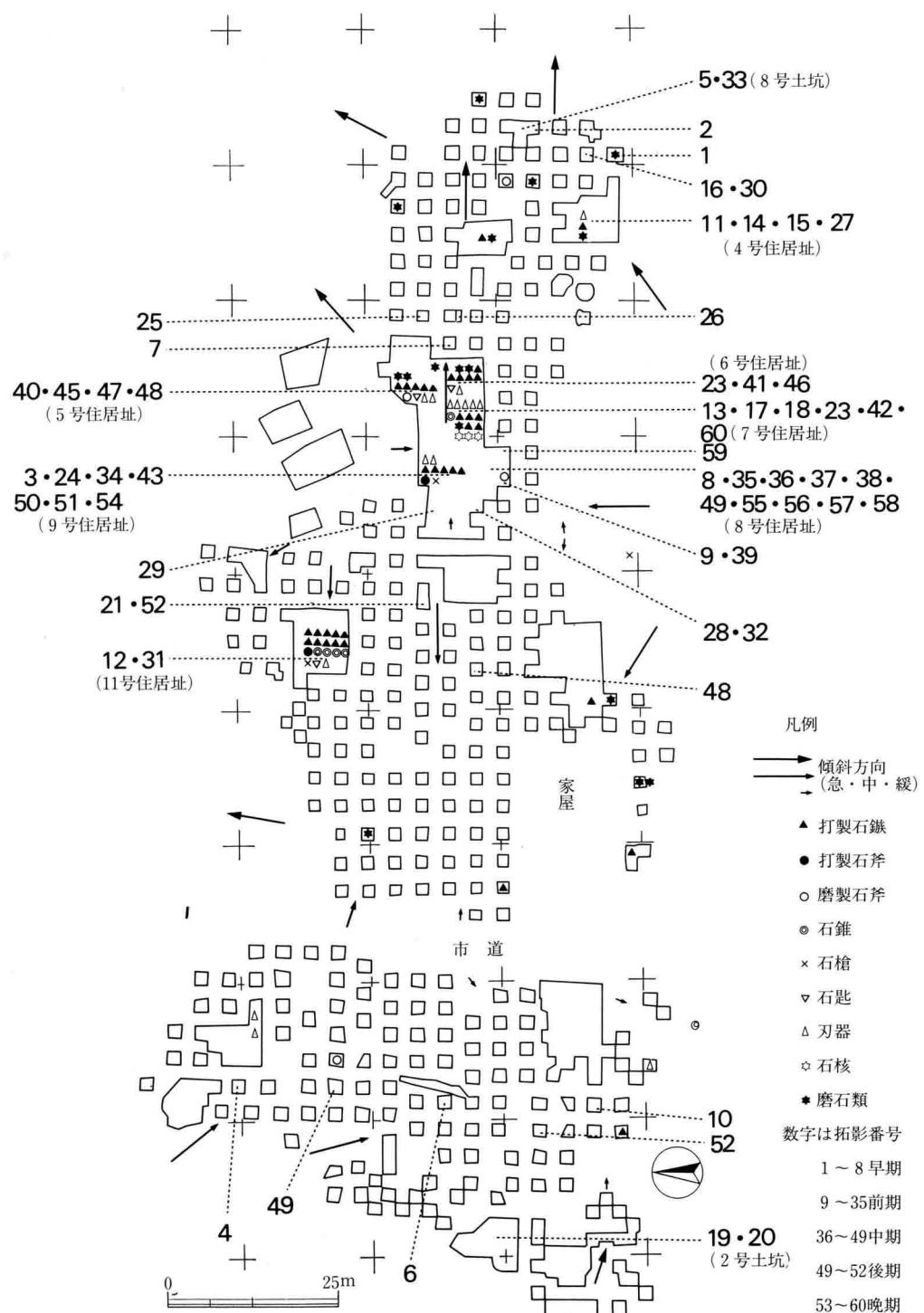
III-10 12号土坑



III-11 16号土坑

## (2) 遺物の出土地点

土器は全て小破片出土で、8号住居址検出の際出土した前期に比定される深鉢形土器の体部下半（51図6）を除き、図上復元されるものはない。早期は調査地西側の東緩斜面及び東端の東急斜面に集中するよう、中央の平坦地からは一点にすぎない。前になるとやや早期の範囲を広げ平坦地からの出土が見られるようになり、繩文時代全期間のうち出土量は最も多い。中期になると平坦地に限られる傾向がうかがわれる。後・晩期も中期の状況を引き継ぐが、調査地西端の東斜面にも散在する。石器類は調査地西端の斜面から5点出土している他は、平坦地付近及び東急斜面からの出土である。早期のものと考えられる特殊磨石（III-14-89~92）は調査地東端の斜面からのものである。数の上では石鏃が最も多く、次に多用途の刃器が次ぐ。打製石斧は試掘調査で得たものを含め3点にすぎない点注意され、磨製石斧も3点のみである。磨石類は調査地中央の西斜面から東端まで散在するが、平坦地地形変換点から東斜面に多い。土器・石器類が集中して出土するのは中央付近の平坦地で、それも平安時代住居址覆土及び周辺からである。5号～7号・9号住居址では土器・石器類共に出土しているのに



対し、8号住居址では土器のみであり、11号住居址では圧倒的に石器類が多い。8号住居址の磨製石斧はカマド火床からの出土で、原位置出土ではない。遺物の器種には差があり、また点としてグリット・面としての住居址周辺との調査空間の違いがあるけれども縄文時代遺構と平安時代遺構が重複関係にあった様相がうかがえる。12号住居址・柱穴群3周辺から該期の遺物が出土しなかったこともこの点を裏付けよう。

### (3) 土 器

今回の調査で出土した縄文土器は整理用平箱1箱程度で、すべて破片である。時期は早期から晩期まで断続的で、縄文時代と思われる数基の土坑から出土した資料のほかに、遺構に伴うものは見られない。小破片や器面が劣化して図化にたえないものが多く、ここでは時期・型式がおおよそわかる資料の大半を抽出して図示し、時期を追って説明する。

#### 第Ⅰ群 早期の土器（第13図1～8）

##### 第1類 押型文土器（第13図1～5）

図示しなかったものも含めて、すべて楕円押型文である。胎土に砂をやや多く含み、器壁は1が6mmほど、その他は8～10mmとやや厚い。1・2は口縁部である。1は直線的に開き、口唇端部は内そぎ状で、原体を深く刻んだ米粒大の楕円文を施す。2は外反ぎみに開き、頸部に刺突列がめぐる。楕円文の粒は5とともに長径8mmほどと大きい。3は器面に対して斜位に施文するらしい。これらは細久保式に比定される。

##### 第2類 条痕文土器（第13図6～8）

いずれも胎土に纖維を含み、器壁は7mm前後である。器面は摩滅し、6は内面、7は外面が採拓できない。6は斜位、7・8は横位の条痕文を施し、原体は絡条体らしい。

#### 第Ⅱ群 前期の土器（第13図9～35）

##### 第1類 縄文施文土器（第13図9～14）

9～13は縄文LRを横位施文する。14は付加条の原体らしい。9のみ胎土に纖維を含み前期前半、その他は第3類に伴うと思われる。

##### 第2類 中葉段階の土器（第13図17）

半截竹管を器面に垂直に刺突した、C字形の爪形文が横位にめぐる。2列観察され、上下で爪形文の向きが逆である。有尾式に比定できそうである。1点のみ。

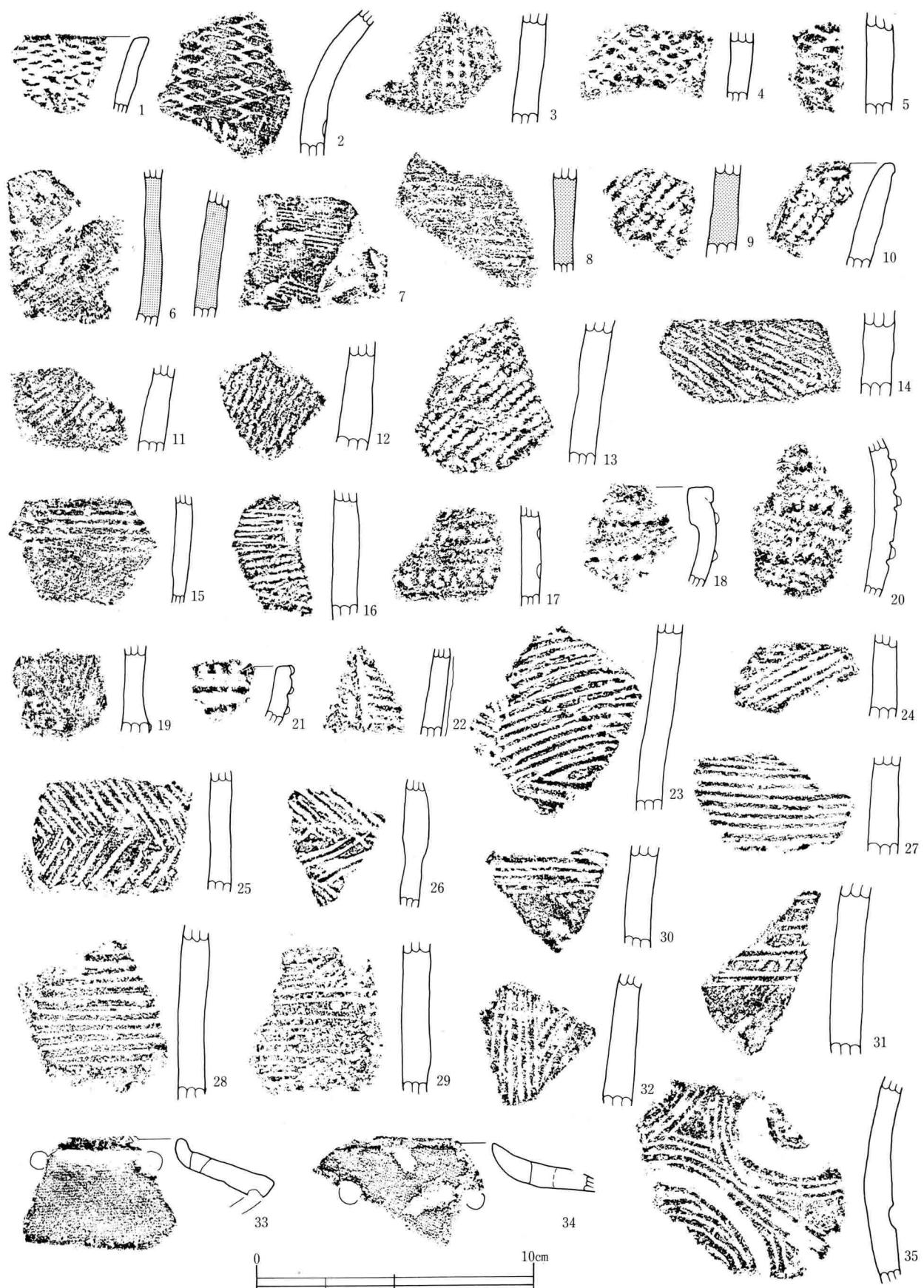
##### 第3類 後葉段階の土器（第13図15・16・18～35）

15・16は半截竹管による横位の集合沈線文に縄文を伴う。諸磯b式新段階の土器で、2点のみ。

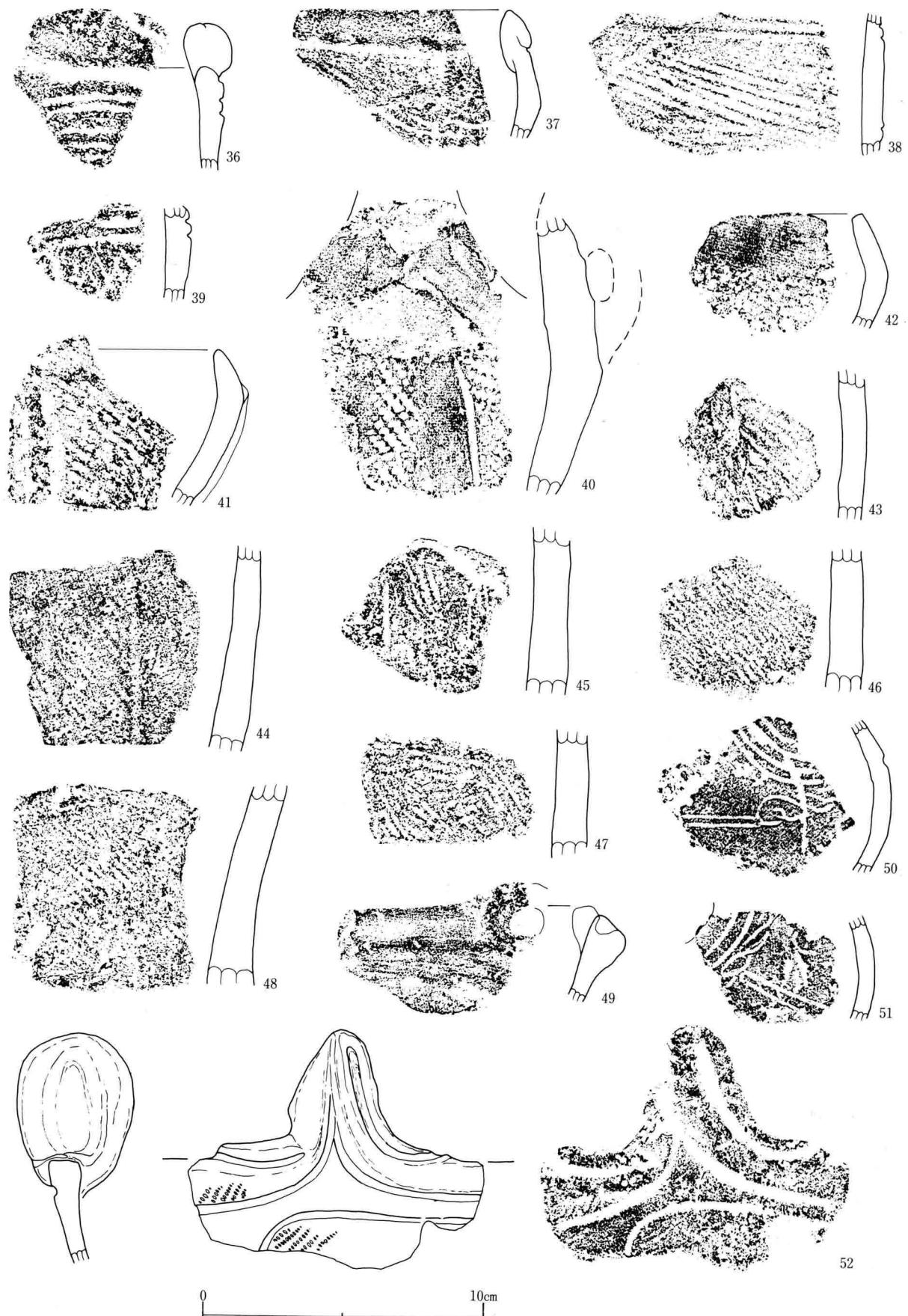
18・20～22は結節浮線文が見られる。18・20・21は横位の複列で、摩滅のため地文は観察できない。22は集合沈線文地文で、縦位に貼付する。19は底部近くで、小さなボタン状貼付文がある。これらは諸磯c式である。集合沈線文のみの23～32もおおむね同時期で、やや新しいものが含まれるかもしれない。縄文土器の中では出土点数がもっとも多い。これは器壁が10mm程度の厚いものが多く、焼成が良い。23はレンズ状、25・26は横位、32は縦位の矢羽状、その他は横位平行に施文される。23・27などは細い原体で深く施文され、25はやや間隔があき、28～32は浅い施文である。

35はゆるくくびれる胴部に太い沈線文と集合沈線文を重ねて渦巻文を描くらしいが、三角形の印刻は施されない。十三菩提式期の土器で、1点のみ。

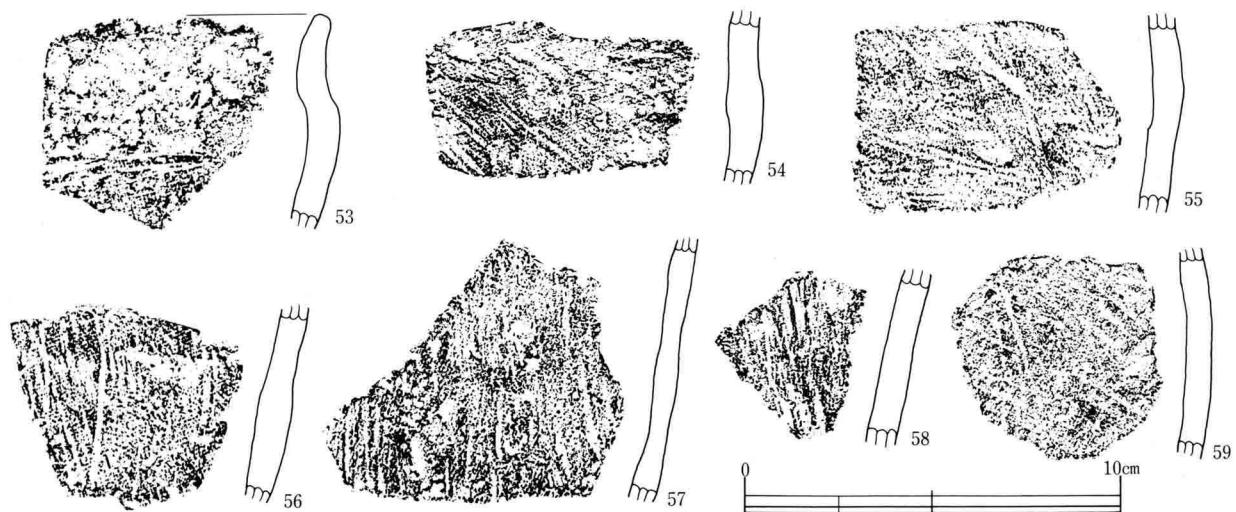
33・34は有孔浅鉢で、わずかに立ち上がる口唇部に1列の穴がめぐる。急角度に屈曲する肩をもつ、かなり扁平な器形と思われる。



13図 繩文時代土器拓影図 (1 : 2) (1)



14図 繩文時代土器拓影図（1：2）(2)



15図 繩文時代土器拓影図 (1 : 2) (3)

### 第III群 中期の土器 (第14図36~49)

#### 第1類 初頭段階の土器 (第14図36~39)

胎土に砂を多く含みザラザラした感じで、雲母が目立つ。36は口縁部に肥厚した突起がある。37は内湾する口唇部に粘土をかぶせて二重に作る。いずれも半截竹管による集合沈線文を施し、38は区画内を斜位、37・39は格子状に充填する。五領ヶ台II式であろう。

#### 第2類 末葉段階の土器 (第14図40~48)

本類はSB 5に2・3個体分が集中したほか、SB 8・9にもやや多かった。出土量が多いにもかかわらず摩滅が著しいため、図示できた資料は少ない。胎土に砂が多く、器壁は41~43が7・8mmのほか、10mmを上回る厚手が多い。40~42は内湾する口縁部に無文帯をもつ。40は波状口縁に橋状把手がつく深鉢で、縦位の磨消縄文を施す。41は口縁部下に横位、そこから縦位に微隆起帯をめぐらす。43は縦位の微隆起帯が剥落し、沈線区画を伴う。44・45は縦位の磨消縄文を施す。46~48は縄文のみで、47・48は同一個体らしく施文方向が乱れる。これらの縄文はすべてLRである。いずれも加曾利E IV式である。

### 第IV群 後期の土器 (第14図49~52)

全点を図示した。49は堀之内1式の鉢で、外反する口縁部はかなり厚い。盲孔を施し、沈線はめぐらない。50・51は同一個体の注口土器で、黒色を呈する。51には注口接合部が見られ、ここに平行沈線文を重ねて縄状文を描く。加曾利B 1式である。52は耳状の大形突起をもつ深鉢である。突起から沈線をめぐらせて口縁部を磨消縄文で縁取り、曲線的な入組風の文様を配するらしい。50・51と同時期であろうか。

### 第V群 晩期の土器 (第15図53~60)

SB 8付近から多少まとまって出土し、個体数は少ないらしい。いずれも浮線網状文系に属す甕である。53は肩部が明瞭で短い外反口縁をもち、細い半截竹管で横位に条痕文を施す。胎土中に炭化した粒が観察される。54・55もわずかに隆起する退化した肩部で、半截竹管による斜位の条痕文を乱雜に施す。56~60は胴部で、56~58は同一個体であろう。縦位の条痕文を施し、内面は横位にヘラナデするがでこぼこしている。60は周囲を打ち欠いた土製円板のようである。これらは細密条痕を施す氷I式の甕の退化形態と見られ、いわゆる氷II式期に位置付くものであろう。

これまで説明してきた土器のうち、第IV群とした後期土器の52について若干補足しておく。この種の土器は東北地方一円に広く分布が知られる後期中葉の土器であるが、ひとつの遺跡からの出土量はきわめて少ないことが

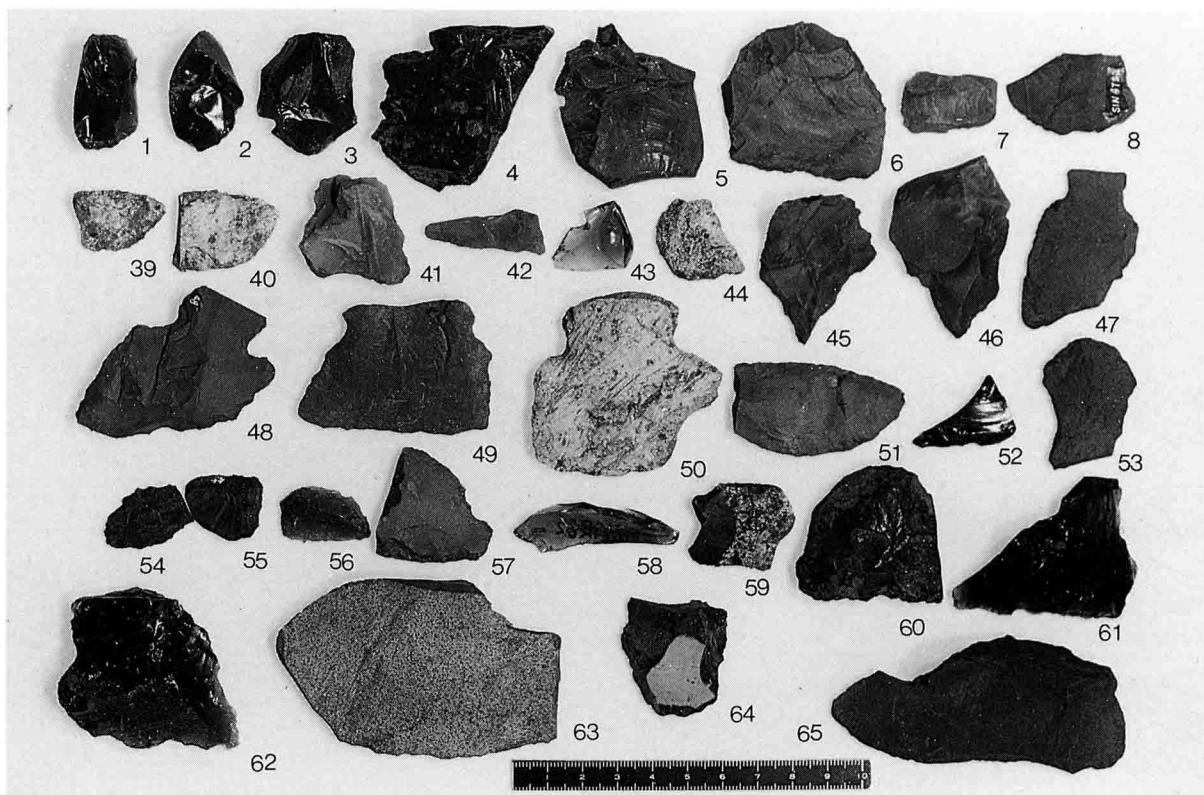
指摘されている。十腰内式・宝ヶ峯式・三仏生式などの構成要素をなすらしいが、時期的な位置付けはいまひとつ明らかではないらしい。多くは3単位の大形突起をもつ台付深鉢で、磨消縄文の沈線区画に刺突文が添う場合が一般的である。長野県内の例としては、野沢温泉村岡ノ峯遺跡、牟礼村明専寺遺跡があり、丸子町深町遺跡にも認められそうである。山梨県では金生遺跡32号住居例がある。岡ノ峯・深町遺跡は時期幅が長く限定できないが、明専寺遺跡は加曾利B1式までにとどまり、金生遺跡は堀之内2式ころらしい。本遺跡は共伴関係は指摘できないものの、加曾利B1式が出土しているため、ここに編年的位置付けを試みておきたい。長野県の堀之内1式期の土器の成立には東北南部の土器群の影響が強く、また後期末葉には少量とはいえ瘤付土器が必ず伴うことが知られている。後期中葉段階の東北系土器は指摘されたことがなく、希少な1例として注意しておきたい。

#### (4) 石 器

出土した石器のうち、石器制作に伴って石屑としてはじき出された資料（石核・剥片・碎片など）を除いた、道具としての石器は88点を数える。その内訳は、石鎌31点、石槍2点、石錐6点、石匙4点、刃器15点、打製石斧8点、磨製石斧3点、磨石類（凹石・敲石）15点、特殊磨石4点である。遺構に伴うものではなく、土器との共伴関係も明確には把握できないため、時期が特定できるのは一部の器種に限られる。

##### 石核・剥片（III-12 1～6）

主に石鎌制作にかかわると思われる石屑は、黒曜石が過半数を占め、チャートがこれに次ぐ。1～3は黒曜石の残核で、一部に自然面を残す。4は剥片素材の石核であろう。この側縁の一部に剥離を施して刃器とする例もある（62・63）。5は加工痕が見られず、原石であろう。6はチャートの大形剥片である。7・8は両極剥離痕をもつ剥片である。このほかにホルンフェルスも少量見られる。鉄石英が多量に出土しているが、少数の道具（21・39・40・54・60・61）も見られることから、良質のものは利用されている。



III-12 石核・剥片・刃器



III-13 石 鎌

#### 石 鎌 (III-13 9~38)

製品24点の形態の内訳は、凹基無茎が18点ともっとも多く（9~25）、平基3点（26~28）、不明1点（29）、有茎2点（30・31）である。基部の抉りが比較的浅く（9~15・22~25）、短身で脚部が尖る形態が主体である。長身の形態（16~20・22~25）はチャート製に多い。20は脚端部が角ばる早期に多い形である。有茎の31はいわゆる飛行機鎌に近く、晩期の所産であろう。32~38は未製品と思われる。

#### 石 槍 (III-12 39・40)

2点とも欠損品で、小形の柳葉形と思われるが、刀器の可能性もある。

#### 石 錐 (III-12 41~46)

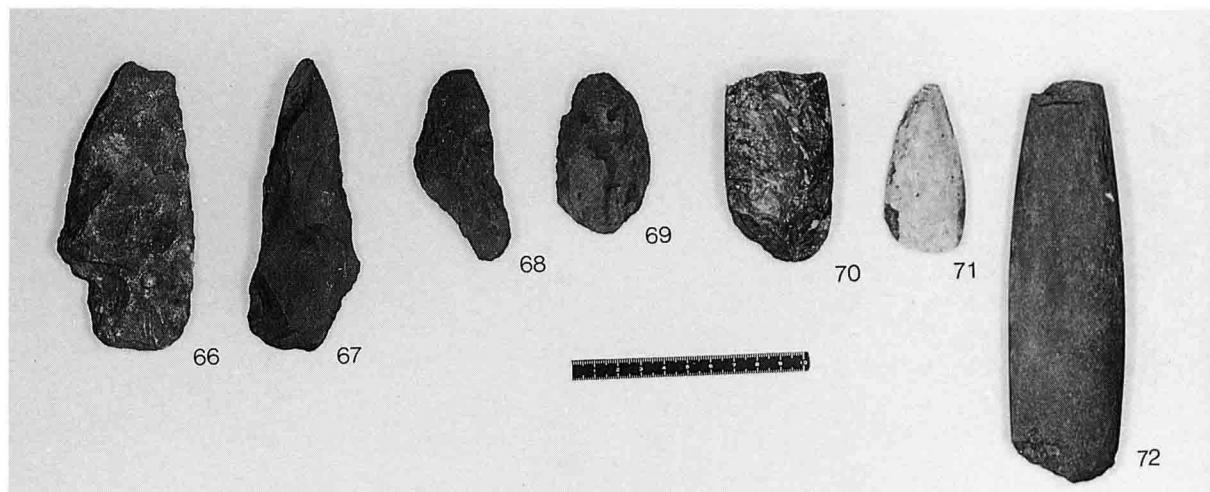
チャート4点、黒曜石・その他各1点である。41は全体が角柱状である。42は大きな頭部を作り出し、刃部を欠損するらしい。43~46は、大小の三角形剥片のもっとも尖る部分に剥離を施す。押し錐と思われるが、43・44は石鎌未製品や刀器かもしれない。

#### 石 鍔 (III-12 47~50)

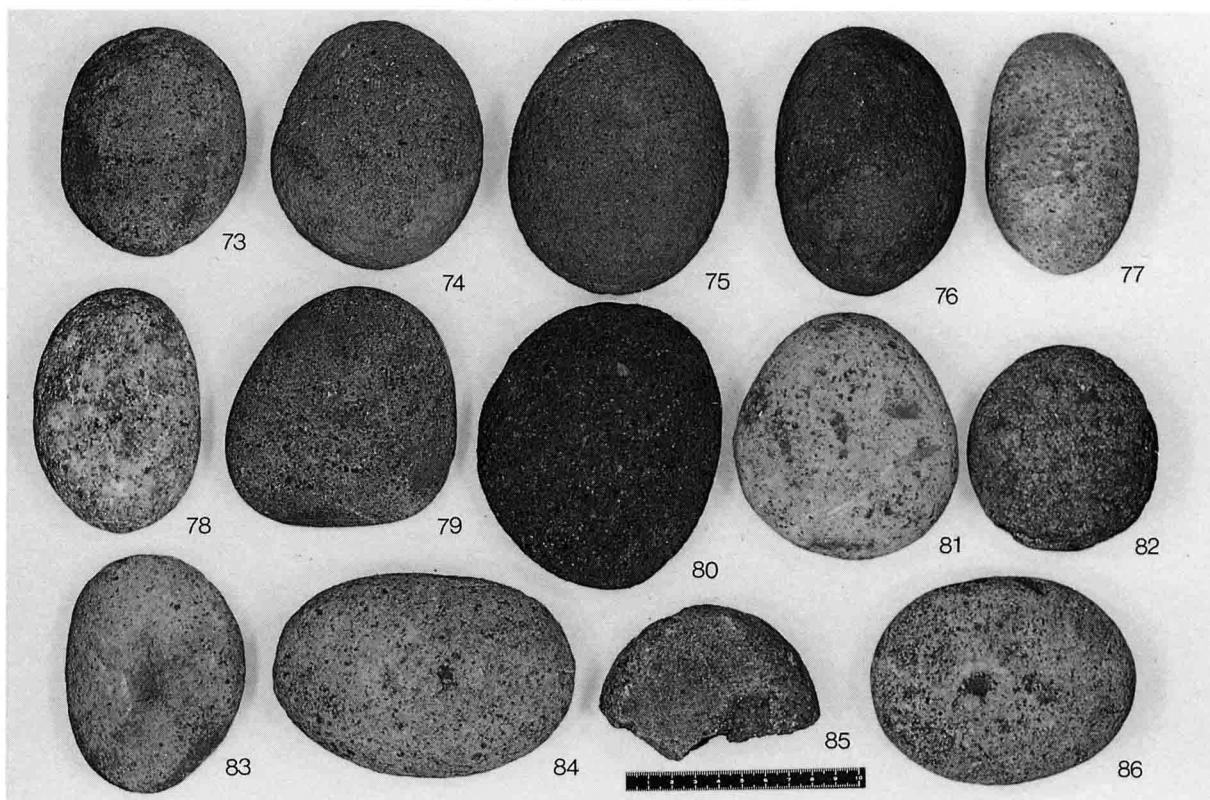
ホルンフェルス・安山岩各2点で横長剥片を素材とするらしい。つまみ部の位置から47・48が斜め形、49・50が横形となる。後者はつまみが大きい。47は刃部が2カ所、その他は1カ所である。

#### 刃 器 (III-12 51~65)

石質はこれまでにあげたすべてが用いられ、法量・形態ともさまざまである。51~54は2側縁に剥離を施し、54は石鍔の可能性がある。55~58は1または2側縁に小剥離痕が見られる。59~63は大形で、ラフな剥離を施す。64・65はそれらとは石質が異なり、粗大な横長剥片の1側縁に剥離痕がある。さほど重量感はないが、通常の鋭利なスクレイパーとは区別されそうである。



III-14 打製石斧・磨製石斧



III-15 磨石類

#### 打製石斧 (III-14 66~69)

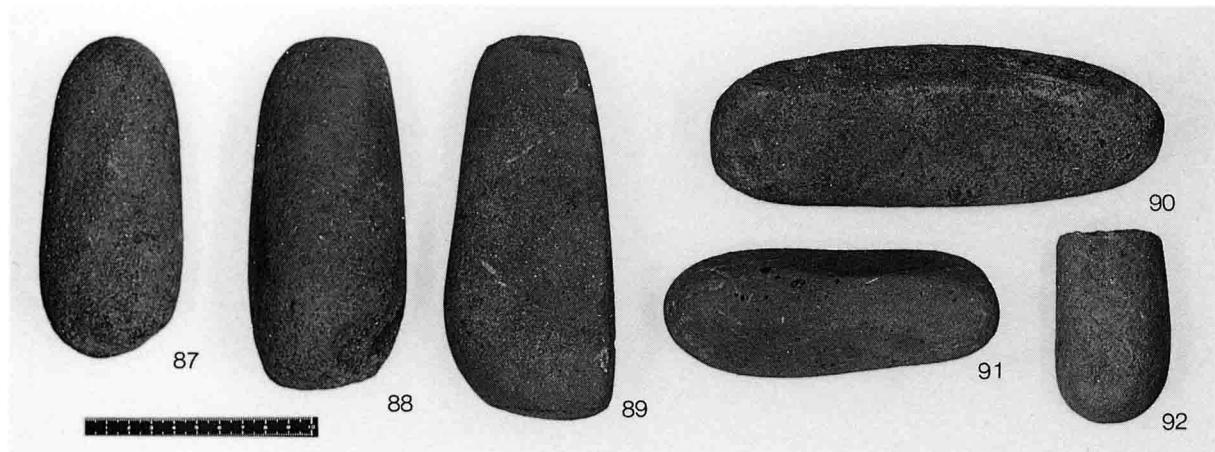
頁岩を用いる。図示した4点は刃部に向かって直線的に広がる撥形で、反り身ではない。66・68は刃部、67・69は基部を欠損し、4点とも刃部が摩耗している。

#### 磨製石斧 (III-14 70~72)

70は緑色片岩を用い、長さ17cmと長大で、側縁が薄い。刃部は片刃状に研ぎ出す。71・72は蛇紋岩である。71は基部を欠損し、断面楕円形で蛤刃風の刃部をもつ。72は基部が狭く薄い。刃部は片刃である。

#### 磨石類 (III-15・16 73~88)

花崗岩2点のほかは、安山岩である。73~78は磨面のみが見られる。79~82はくぼみがある。76~82はアバタ状わずかにへこみ、83~86はくぼみが明瞭で2・3個が連接し、表裏両面にある。87・88は柱状の石材の両端に



III-16 磨石 (敲打器)・特殊磨石

敲打痕があり、87は微弱、88は平になるまで用いている。

特殊磨石 (III-16 89~92)

89・92が硬砂岩、他は安山岩である。89~91は側縁の稜線が顕著な磨面となっている。89は88同様両端が敲打に用いられるほか、2側面にもアバタ状痕がある。90も両端が小さな平坦面となる。92は小形で、側縁に敲打痕があり、平坦な折れ面の周囲に小剝離痕が見られる。特殊磨石のスタンプ形石器への転用であろう。これらは早期に特徴的な石器である。

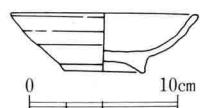
## 5 平安時代の遺構と遺物

猪平遺跡で初めての生活跡を確認できるのは平安時代からである。今回の調査で住居址12軒、掘立柱建物址3棟、柱穴群3ヶ所、土坑8基がある。覆土は炭化物を含む黒褐色砂質土で、基盤層は黄褐色粘土質土である。

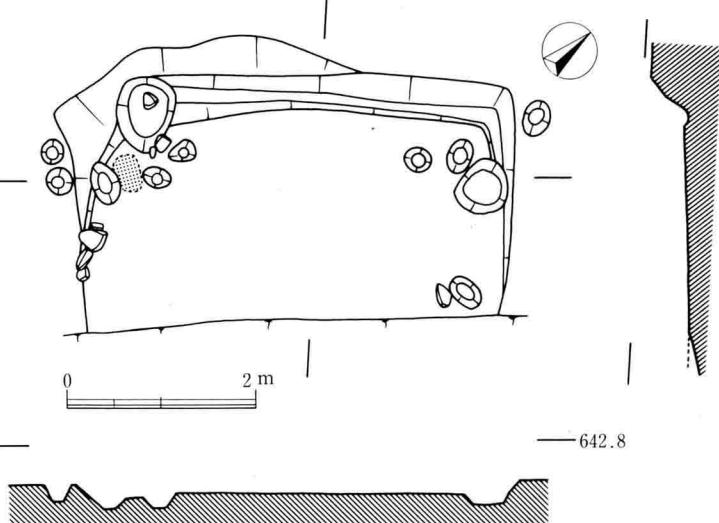
### 1号住居址

遺構（17図、III-17・18） 調査地の西端に位置し、東緩斜面に構築されていることと暗渠状遺構により破壊を受けたことにより、東側半分程は検出できなかった。形態は長方形を呈する。長軸は標高線上にあり、N46°E方向を指す。規模は長軸外法4.6m・内法4.5mを測るが、短軸は不明である。掘り込みは残存状態が良好な西壁で24cmになり、西南隅付近は不整形に二段掘りされる。カマドは西南隅に構築されるが、調査時では構築石材と火床のみ残存していたにすぎない。床面は基盤層の角礫が露出し、南北は平坦であるが東西は地形に添って東へ傾斜する。カマド周辺と北壁の内外に柱穴が認められ、このうち北壁に添った2個とカマド西の西壁下の1個は主柱穴の可能性がある。この他の住居施設にはカマド右に長軸80cm・深さ20cm程の卵形を呈する貯蔵穴様の掘り込み、西壁下に幅15~20cm・深さ8cmの周溝がある。

遺物（16図） 出土量は少なく、器種には土師器壙（1）・甕、須恵器壙片があるにすぎない。土師器壙は楕形を呈し、断面三角形を呈する高台が付される。須恵器壙は1片にすぎず混入品であろう。



16図 1号住居址出土土器実測図 (1:4)



17図 1号住居址実測図 (1:80)



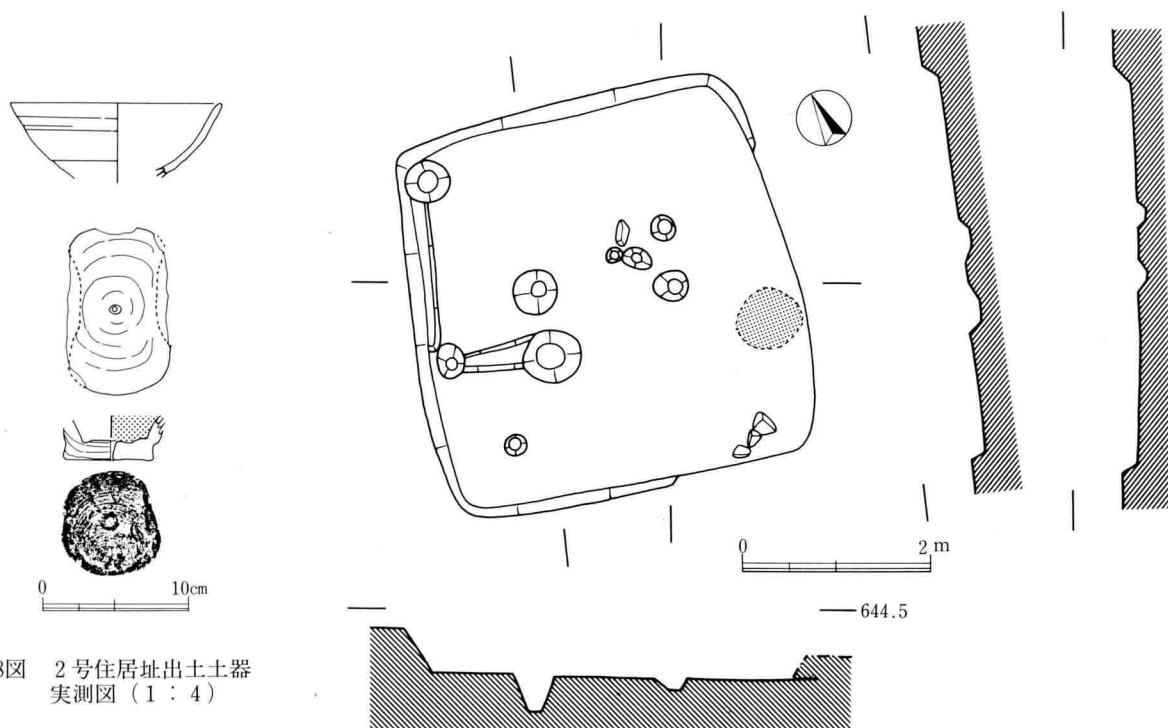
III-17 1号住居址 (東より)



III-18 1号住居址（北より）、暗渠状遺構

## 2号住居址

遺構（19図、III-19） 調査の西南端の南東緩傾斜上にあり、縄文時代の16号土坑と西壁で重複関係にある。単独検出遺構であるが、東壁は黒褐色土層からの掘り込みであったためグリット調査の際除去してしまった。調査では火床焼土を確認し、住居址の可能性を求めて周辺グリットの拡張を試みたところほぼ全容を露呈することができた。形態は外法4.2m・内法3.9m規模の隅丸方形を呈する。内法面積は約15.2m<sup>2</sup>である。主軸方向はN74°



18図 2号住居址出土土器  
実測図（1：4）

19図 2号住居址実測図（1：80）



III-19 2号住居址、16号土坑

Eを指す。掘り込みは西壁で35cm・南壁18cm・北壁で18cmを測る。床面は軟弱で平坦であるが、東側へ若干の傾斜を有する。カマドは東壁の中央より南に偏して構築されるが、主軸方向70cm・短軸62cmの不整円形の火床を残すにすぎない。グリット調査では構築石材は認められなかったが、南東隅部にそれらしき3個の角礫が床面に接して残存していた。西壁下北側半分に幅15cm・深さ5cm程の周溝が認められ、これに直交するように住居址中央より南側に両端にピットを有する溝が掘られている。間敷切用の遺構であろうか。住居址中央付近に5個のピットが検出されるが方形の小屋組配列にはならない。

遺物（18図） 出土量は多くない。グリット番号を付した遺物収納袋からのものが多い点、ほとんどがカマド周辺遺物として扱える。器種には、土師器壺（1）・耳皿（2）・小形甕があるにすぎない。壺・耳皿は内面が黒色処理される。耳皿の底部には小円孔が穿たれ、外面に糸切り痕を残す。耳部は欠損している。小形甕はロクロにより成形され、顕著なロクロメが観察される。

### 3号住居址

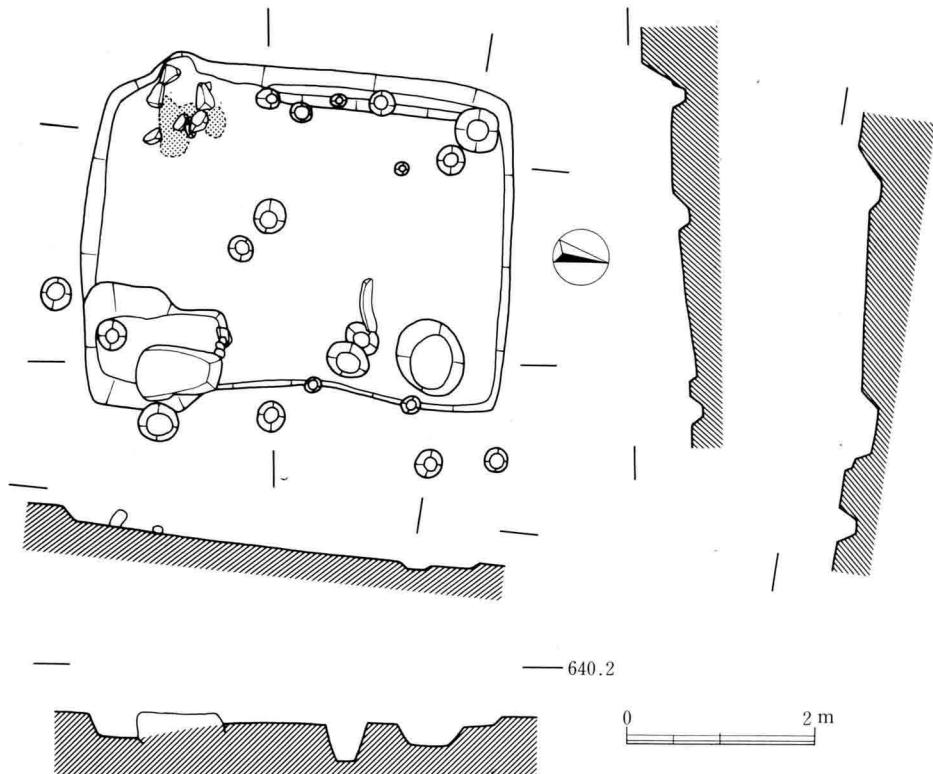
遺構（20・21図、III-20・21・22） 調査地東端近くの東緩傾斜面に位置し、近隣遺構は南へ12mの距離に4号住居址がある。単独検出遺構であるが、傾斜地へ構築されているため、東壁の立ち上がりはわずかな数値になる。形態は長方形を呈するが、南隅に丸味があり、南東隅部が張り出す。長軸は標高線に添ってあり、その方向はほぼ南北のN 6° Eを指す。長軸外法4.5m・内法4.3m、短軸（主軸）外法3.4m・内法3.1mを測り、床面積は約13.3m<sup>2</sup>の規模になる。掘り込みは西・南壁20cm、北壁10cm・東壁5cmにすぎず、床面は地形に応じて東・北方へ傾斜し、中央付近のみ堅緻で外周は軟弱である。カマドは南西隅部に斜に若干突出する形態で構築される。残存状況から石芯製両袖形のものであり、火床の範囲から主軸約1m、内法40cm規模を想定する。周溝は西壁下のみに認められ幅20cm・深さ10cm程のものである。柱穴は遺構内外から検出され、そのいくつかは小屋組用のものと思われる。南東隅部に土坑を伴う平石がある。形態は不整の台形状を呈し、長軸90cm・最大幅55cmを測る。土坑は隅丸長方形で、長軸外法1.5m・東西軸1.25m・深さ20cmの規模になる。平石と合せて藁叩き等の工作台と考



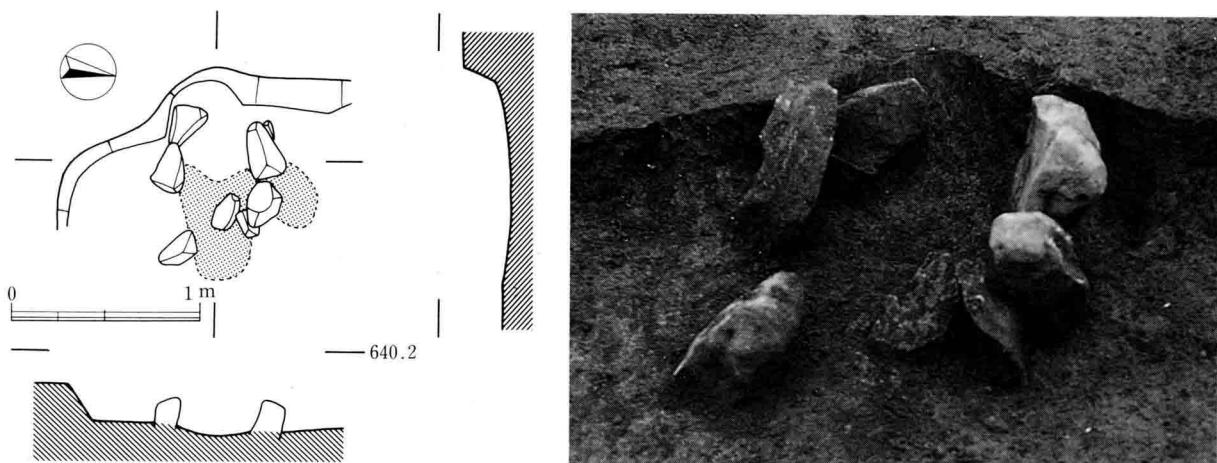
III-20 3号住居址（東より）



III-21 3号住居址（北より）



20図 3号住居址実測図 (1:80)



21図 3号住居址カマド実測図 (1:40)

III-22 3号住居址カマド

えられる。

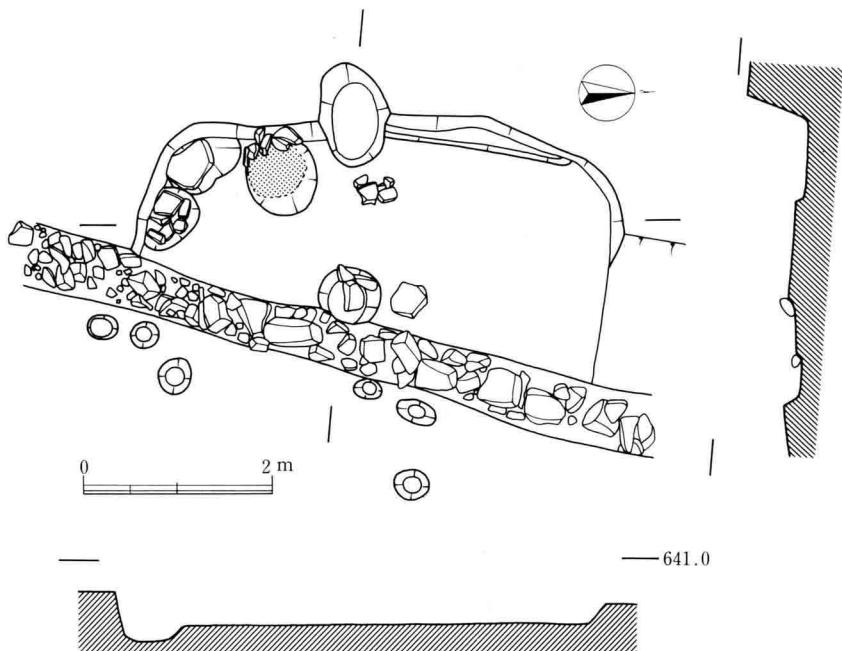
**遺物** 出土量は少なく、それも図上復元できる程の土器片はない。器種に土師器椀・内面黒色処理が施された壊片があるのみである。

#### 4号住居址

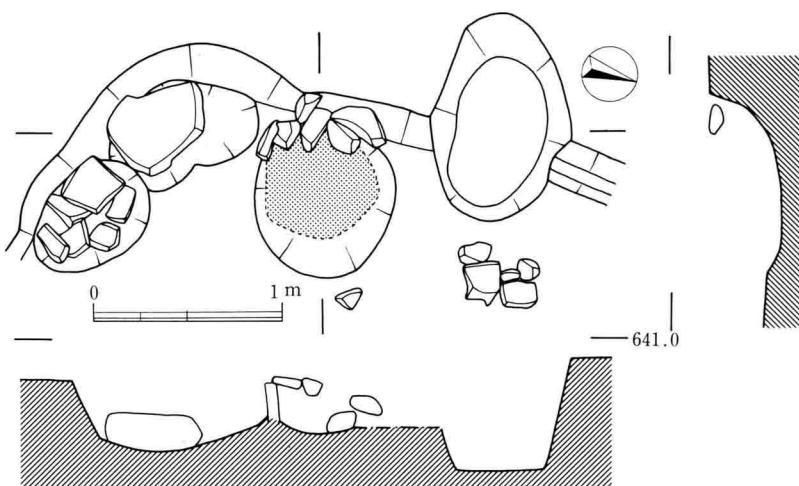
**遺構** (22・23図、III-23~25) 調査地の東端付近に位置し、3号住居址とほぼ同じ標高にある。小丘陵から東北方向の急傾斜地が緩傾斜地を変換する地点に構築されるが、東側半分程は傾斜による流出土及び暗渠様遺構により破壊を受ける。形態は隅丸長方形を推定する。長軸は標高線に添って設定され、その方向はほぼ南北軸に等しい。東西軸は不明であるが、長軸外法5.0m・内法4.8mの規模になる。掘り込みは西壁40cmを最高に、南・北壁は傾斜に応じて数値を減ずる。床面は平坦で、カマド前面から住居址中央にかけて堅緻な床が認められた。カ

マドは3号住居址と同様に西南隅部に斜方向をもって構築されるが、調査時には破壊を受け火床と構築石材と思われる小角礫が散在していたにすぎない。火床規模は主軸95cm・幅75cmを測る。カマド左の隅部に長軸50cm・短軸40cm程の平石が据えられている。工作台としての使用が考えられ、周辺の土坑状掘り込みは平石を埋設する際のものであろう。これに接して長軸70cm・短軸幅50cm・深さ18cmの土坑があり、上面に平石による配石が確認され、埋土には多量の炭化物が含まれていた。用途は不明である。カマド右にも西壁を切り込む長軸1.1m・短軸0.75mの不整楕円形を呈する土坑がある。西端から底面まで60cm程の深さになる。掘り込み形態から別遺構とも考えられるが覆土が同質の黒褐色砂質土であるため住居址の付属施設としておく。その他の遺構として西壁下に周溝が認められる。暗渠状遺構以東に柱穴様ピットが存在するが、住居址との関係は不明である。

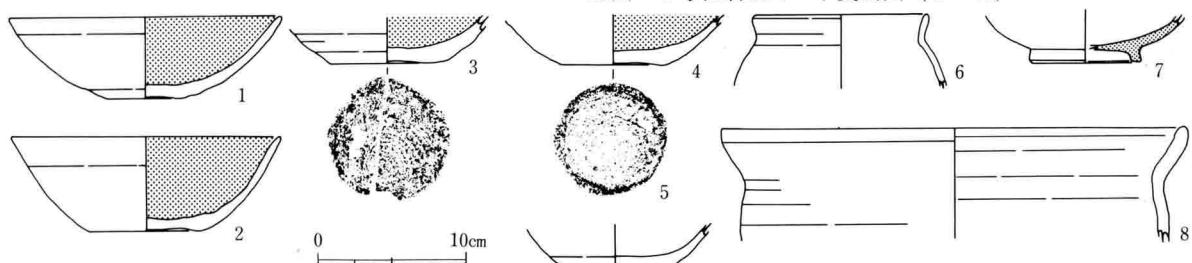
遺物（24図） 遺物の出土量は今回調査した遺構の中では比較的多い。器種には土師器壺（1～5）、甕（6・8）、須恵器高台付壺（7）、灰釉陶器椀がある。図示した壺は底部に糸切り痕を残し、1～4の内面は黒色処理が施される。須恵器壺は椀形を呈し、低い台形の高台が付される。混入品の可能性が高い。土師器甕はロクロ調整を受けており、内外面にロクロメを残す。また釘と思われる鉄製品が1点出土しているが、腐食が進んでおり形状を明確にできなかった。



22図 4号住居址暗渠状遺構（1:80）



23図 4号住居址カマド実測図（1:40）



24図 4号住居址出土土器実測図（1:4）



III-23 4号住居址カマド



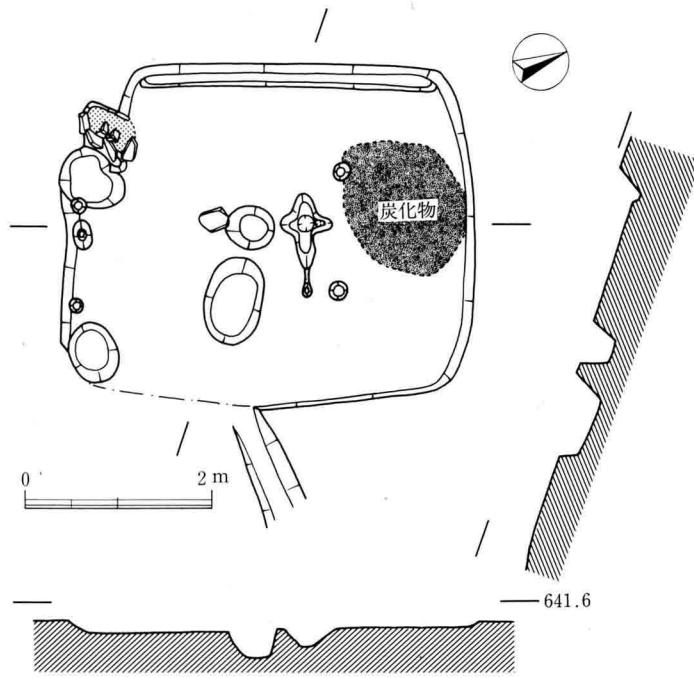
III-24 4号住居址、暗渠状遺構



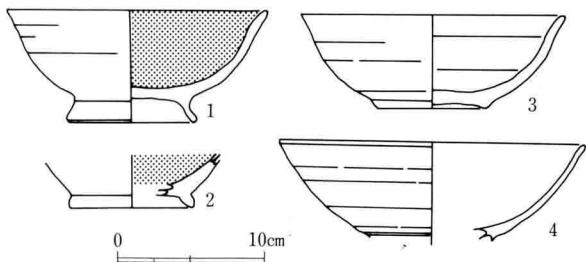
III-25 4号住居址、暗渠状遺構

## 5号住居址

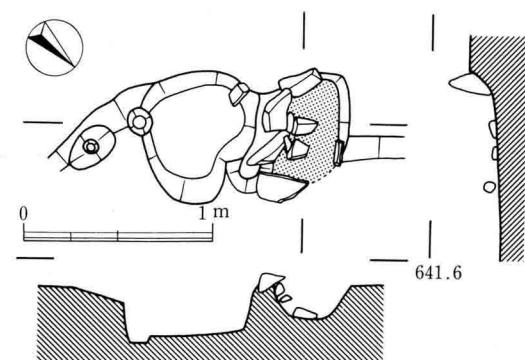
遺構 (25・26・28図、III-26~28) 調査地東側の東・北へ傾斜する緩斜面に位置し、南へ4m程のところに6号住居址がある。この住居址の性格を裏付ける特殊遺構が検出されている。それは後述する小鍛冶遺構である。形態は隅丸長方形を呈するが、南壁がやや張り出す。長軸は等高線に添って設定され、N22°Eの方向を指す。規模は長軸外法4.35m・内法4.15m、東西外法3.65m・内法3.4mで、床面積が約14m<sup>2</sup>になる。掘り込みは緩斜面上方の西壁が20cmを測り、東壁は数cmにすぎない。床面は平坦であるが、東西方向は地形に応じて東傾斜し、中央付近は堅緻である。カマドは西南隅に構築され、斜に突出する石芯製両袖形のものである。調査時には左袖部の石材が残存していたものの、右側は抜き取られていた。火床の範囲から長軸70cm、幅30前後の規模になる。カマド左側には貯蔵穴と推定する最大幅70cm・深さ25cmの不整円形を呈する土坑がある。柱穴は住居址内北寄りと南壁下に直径20cm程のものが検出され、不整形の4個長方形配列になる。西壁下に幅15cm・深さ5cm程の周溝がある。小鍛冶遺構は住居の中央に残されており、鍛冶炉・貯水穴・廃棄物穴と鉄床石からなる。鍛冶炉は四方に突出し、どの方向からも羽口が差し込める形態である。長軸（東西）75cm・短軸50cmの規模で、中央に直径24cm・深さ8cm程の掘り込みがある。鍛冶炉内面は焼土塊化しており、上面は還元化している。貯水穴は鍛冶炉の真横に位置し、最大幅50cm・深さ28cmを測る円形の土坑である。何故に貯水穴と断定したかというと、偶然に発見したもので、降雨後数日を経ても水が枯れなかったことがある。底面は堅く突き固め岩盤状を呈していた。廃棄物穴は長軸92cm・短軸65cmを測る楕円形を呈し、深さは20~35cmである。床面平坦で軟弱である。覆土から炭化物・



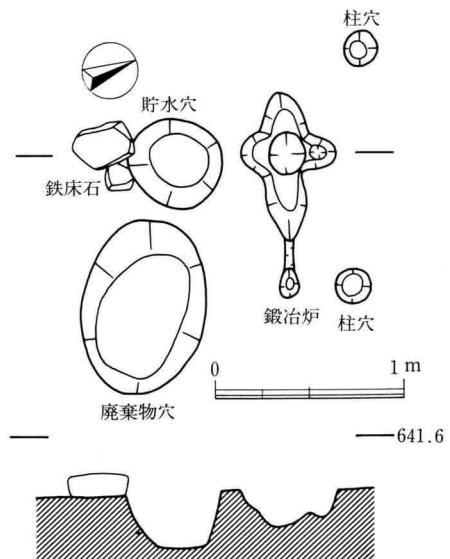
25図 5号住居址実測図 (1:80)



27図 5号住居址出土土器実測図 (1:4)



26図 5号住居址カマド実測図 (1:40)



28図 5号住居址小鍛冶遺構実測図

小粒の鉄滓・溶滓が多量に出土し、炉壁・羽口片も混入していた。鉄床石と目する平石は貯水穴と接して据えられる。ただ焼けた痕跡、周辺から鉄滓等の出土がなかった点付記する。この遺構から北壁にかけての床面上には広範囲にわたり炭化物が認められた。土器類の出土地点はカマド内及び周辺からのものが多い。

遺物（27図） 出土量は少なく、小破片のものが多い。器種には土師器壊（3）・椀（1・2・4）・甕・羽釜、須恵器甕・四耳壺・灰釉陶器椀がある。鉄製品の出土はない。土師器壊類の底部には糸切り痕を残す。羽釜の鍔は全周する形態のものである。



III-26 5号住居址カマド



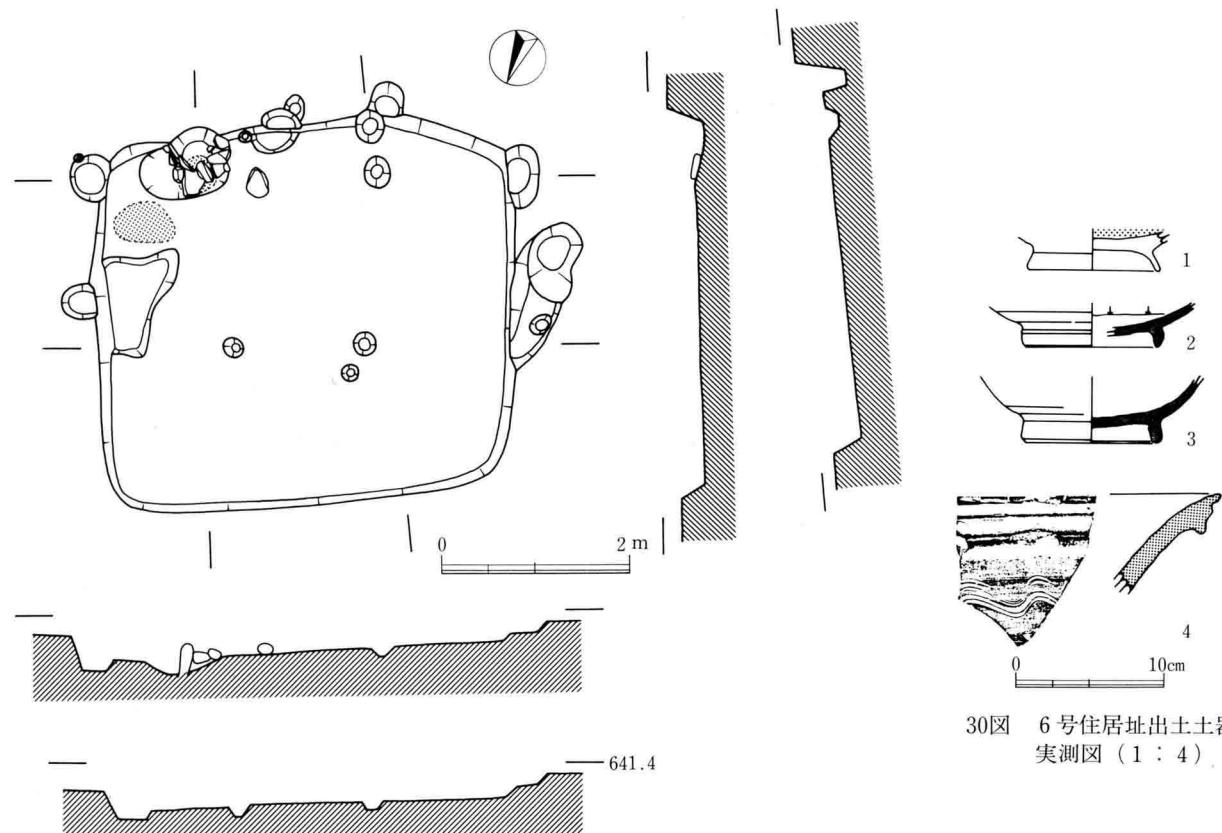
III-27 5号住居址鍛冶址



III-28 5号住居址

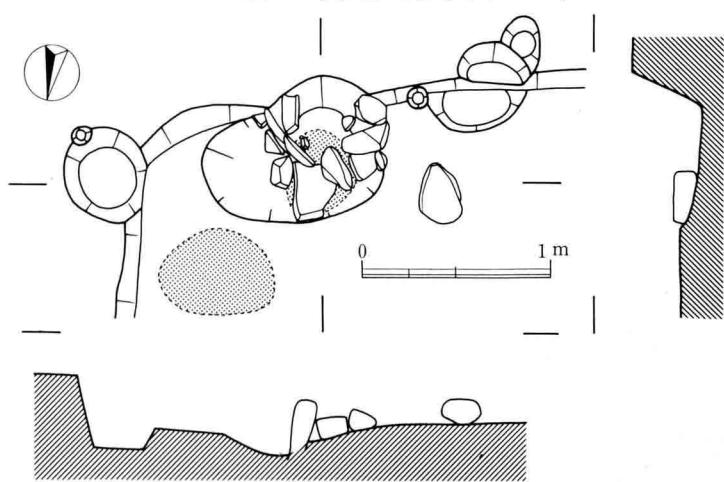
### 6号住居址

遺構 (29・31図、III-29~31) 調査地中央東寄りの東傾する緩斜面に位置し、西に7号住居址、北に5号住居址が近接する。前後関係が不明な柱穴群2と重複関係にある。形態は隅丸長方形を呈するものの長軸方向は東西軸線上にありN64°Eを指す。規模は長軸外法4.5m・内法4.2m、南北軸(主軸)外法4.1m・内法3.58m、床面積約16m<sup>2</sup>になる。掘り込みは西壁28cm・東壁20cmを測るが、地形に応じ床面は東へ傾斜する。南北の床面は平坦である。カマドは長軸隅部に構築されるのは前記の住居址と同様であるが、長軸と同じく本住居址のものは南東隅に構築されるなど90°近い逆転がある。またカマドの作り替えが行なわれており、第1次のものは東壁へ構築されており、長軸65cm・幅40cm程の火床が残存する。第2次のものは第1次のカマド左に掘り込まれた貯蔵穴を埋



30図 6号住居址出土土器  
実測図 (1 : 4)

29図 6号住居址実測図 (1 : 80)



31図 6号住居址カマド実測図 (1 : 40)



III-29 6号住居址カマド

め南壁に構築される。第2次カマドは石芯製両袖形のもので構築石材の残存状況は良い。カマド先端は南壁に突出した形態になり、主軸1.5m・幅65cmの規模である。主柱穴は南壁に掘られた2個と住居址中央北寄りの2個の方形配列をもって推定する。斜面上方壁下の周溝は確認されない。

遺物（30・52図） 出土量は今回の調査の中では比較的多いが、小破片出土である。器種には土師器壊・椀(1)・甕、須恵器甕(4)、灰釉陶器皿(2)・椀(3)がある。この他に火打金具（52図1）・釘(2)・紡錘車の軸(4)と思われる鉄製品が出土している。



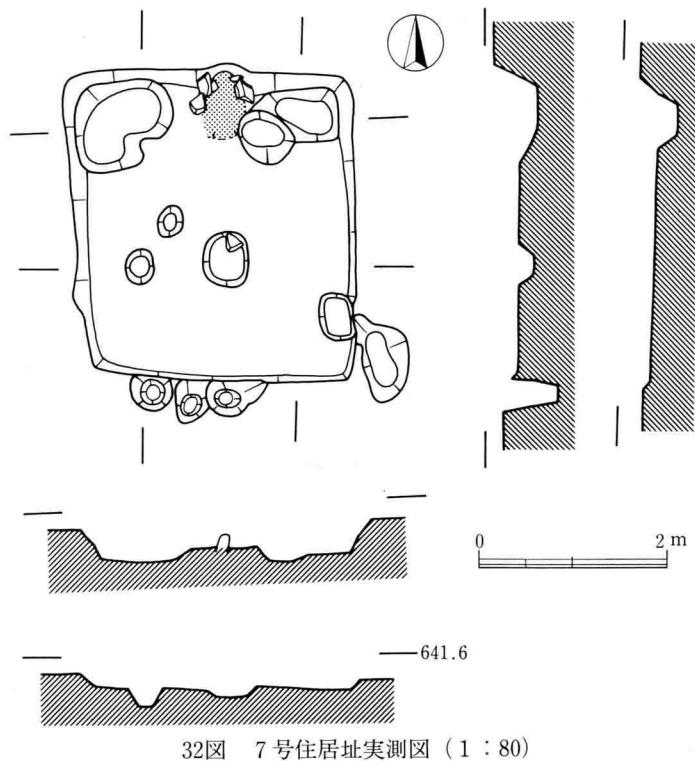
III-30 6号住居址（東より）



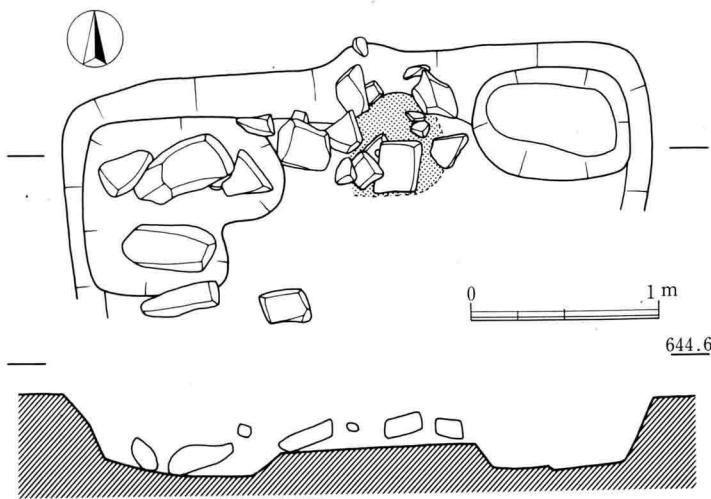
III-31 6号住居址（北より）

### 7号住居址

遺構（32・33図、III-32～34） 調査地中央東寄りの遺構群の一つで、近隣に5号・6号・8号・9号住居址があり、柱穴群2と重複関係にある。形態は方形を呈し、主軸外法3.25m・内法3.05m、東西軸外法3.0m・内法2.75mを測る。床面積は約8m<sup>2</sup>規模の比較的小形の住居址である。主軸方向は南北軸線上にある。掘り込みは東壁10cm・西壁15cm・南壁10cm・北壁20cmを測る。床面は北方向に傾斜を有し、基盤層の小角礫が露出する。カマドは北壁中央に構築された石芯製両袖形態のもので、両袖石材の一部が残存する。火床等から主軸80cm・幅40cmの規模と推定される。カマドの左右、北壁の両隅に貯蔵穴と考えられる掘り込みが認められる。右隅のものは不整橢円形を呈し、長軸（東西軸）0.9m・短軸0.55m・深さ24cmの規模である。左隅のものは隅丸方形の南東角が内に突出する不整形である。東西軸1.05m・南北軸0.95m・深さ20cmの規模で、底面は鍋底状を呈する。本遺構内に大小のピットが存在するが、小屋組配列の方形にならないことから重複関係にある柱穴群に付属するものと



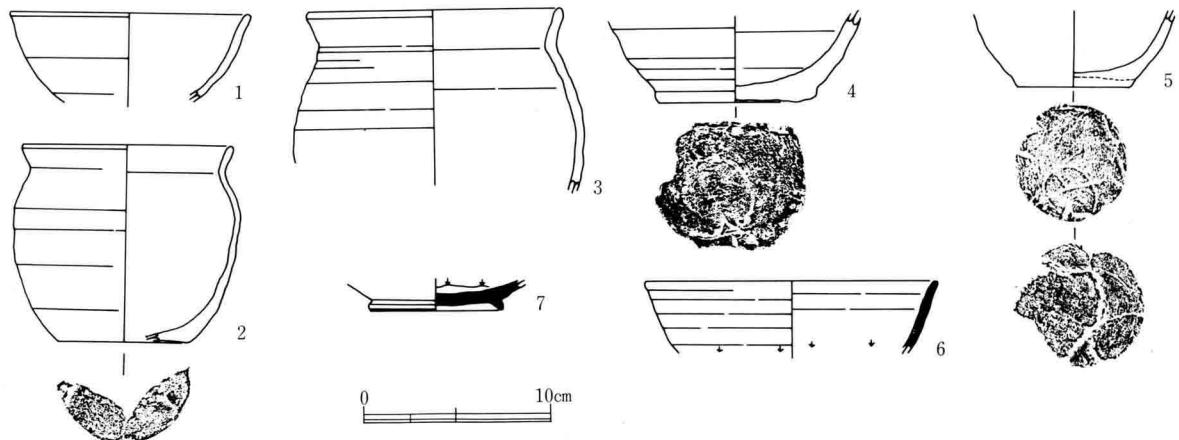
32図 7号住居址実測図 (1:80)



33図 7号住居址カマド実測図 (1:40)



III-32 7号住居址カマド



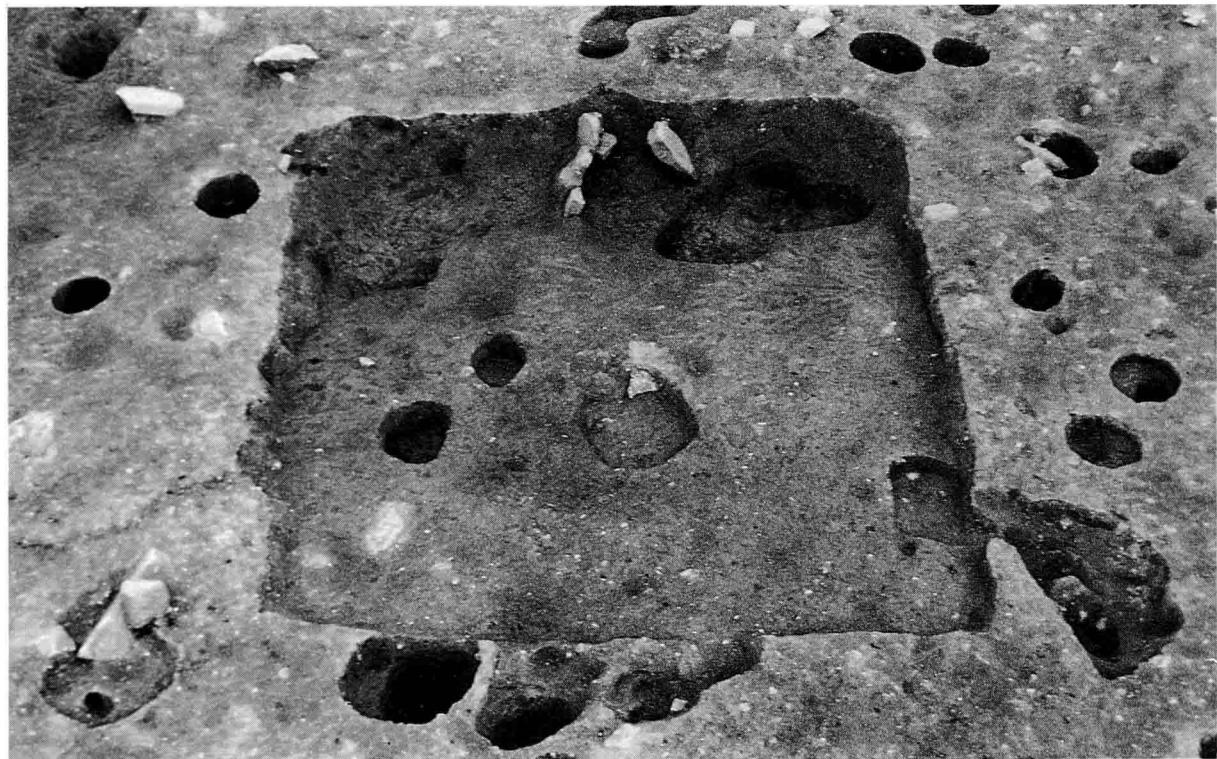
34図 7号住居址出土土器実測図（1：4）



III-33 7号住居址

考えられる。この他に床面上及び左隅貯蔵穴上面より人頭大以上の大きな角礫10数個が住居址の西側半分に偏して検出された。カマド構築石材にしては大形すぎ、また数も多すぎる。あえて推定するならば西側の片屋根のみを押えていた石材と考える。

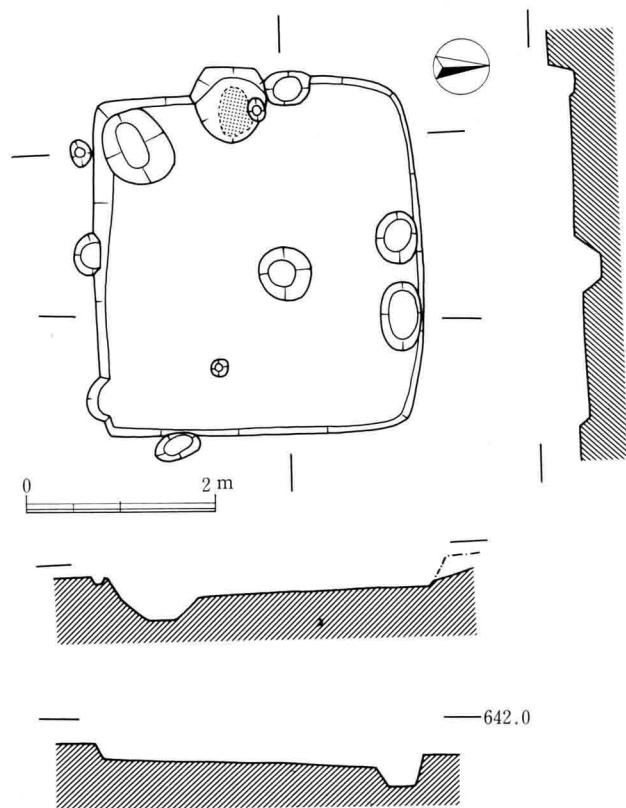
遺物（34・52図） 出土量は少なく、それも破片出土で完形品はない。器種には土師器壊（1）・甕（2～5）、須恵器甕、灰釉陶器椀（6・7）がある。この他に鉄製品の釘（52図3）が出されている。土師器甕は小形の部類に属し、ロクロによって仕上げられ、底部外面に糸切り痕を残す。特に5の底部両面に糸切り痕がある。成形上注意される土器である。灰釉陶器椀の施釉方法は漬け掛によっており、低い三角高台が付せられる。



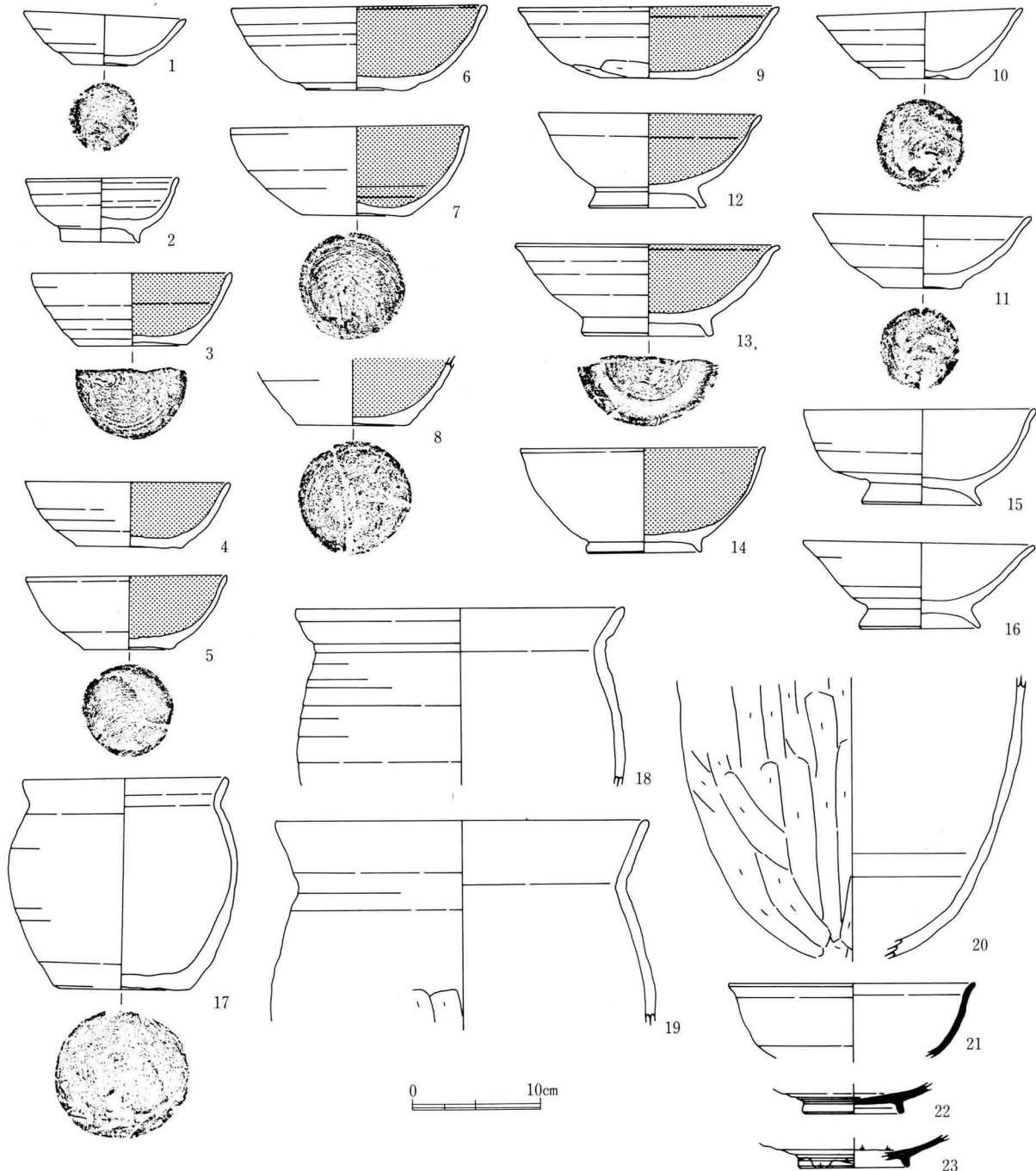
III-34 7号住居址（完掘）

#### 8号住居址

**遺構** (35図、III-35) 調査地の中央東寄りの遺構群の一つで、小丘陵の北斜面下に位置する。この遺構も7号住居址と同様傾斜の弱い平坦地形上に掘り込まれたためか標高線に添った長方形態をとらなく、方形に近い形態になる。規模は主軸外法3.75m・内法3.6m、南北軸外法3.5m・内法3.3mを測り、床面積は約12m<sup>2</sup>の小形な住居址である。主軸の方向はほぼ東西軸線上にある。掘り込みは東・北壁で10cm、西・南壁で20cmを測る。床面は平坦であるが地形傾斜に応じて東・北へ傾斜する。また床面に基盤層の小角礫が露出する。カマドは西壁中央に突出した形で構築されるが、調査時では焼土と火床の四部を検出したにすぎなく、構築石材の散乱も認められなかった。焼土上から縄文時代の磨製石斧が出土している。主軸0.8m・内法幅35cm程の規模を予想する。南西隅に長軸85cm・短軸68cm・深さ26cmの長楕円形を呈する土坑状落ち込みがあり、貯蔵穴の用途を推定する。住居址内に大小のピットが散在するが主柱穴の配列形態にならない。この他北壁に近接する位置に平石が置かれ、工作台の可能性がある。



35図 8号住居址実測図 (1:80)



36図 8号住居址出土土器実測図

遺物（36・52図） 出土量は今回調査した遺構の中で最も多く、完形品も含まれる。器種には土師器壺（1・3～11）・椀（2・12～16）・甕（17～20）、須恵器甕、灰釉陶器椀（21・22）・皿（23）がある。土師器壺には内面黒色処理が施されたものが多く、底部外面に糸切り痕を残す。9の底部外面にはヘラケズリ調整が施される。椀には三角高台（2・14）・三ヶ月形高台が付される。小形の甕（20）は口縁部から底部までロクロにより仕上げられ、大形のもの（18・19）は体部中位から下方までヘラケズリ調整が施される。灰釉陶器椀等の高台は低い台形である。このほかに輸入銅錢が1枚出土した。乾元通宝（唐代・759年頃鋳造）である。



III-35 8号住居址

#### 9号住居址

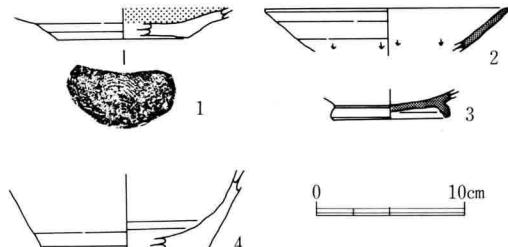
遺構 調査地中央東寄りに位置し、北側微高地からの南東緩斜面上にある。遺構の確認は北壁と東壁の一部にすぎない。掘り込みは数cm程のもので、床面も明確に判別できなかった。北壁の方向はN70°Eを指す。カマド等住居施設は確認できなかつた。床面に想定される範囲に多数のピットを検出したが、柱穴群2と重複関係にあり同質の覆土であったため、住居址の付属ピットを判別することは不可能であった。

遺物（37図） 拡張グリット出土品との混入を恐れるが、他遺構で見られたように出土遺物はそのほとんどが遺構内検出であるのでこれらもほぼ間違いかろう。出土量は少ない。器種には土師器壺(1)・甕(4)、灰釉陶器皿(2)・椀(3)・段皿・長頸壺がある。

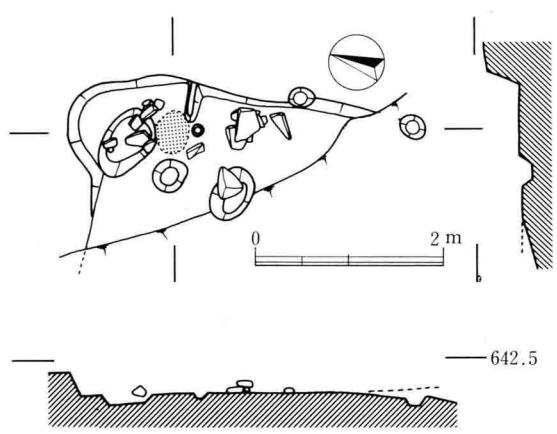
#### 10号住居址

遺構（38図、III-36・37） 調査地中央付近の北に位置し、微高地の北西斜面に構築された住居址である。調査では東壁と北壁の一部を検出したにすぎない。大部分は耕作地造成の際に掘削される。規模は不明であるが、主軸はほぼ南北を指す。掘り込みは東壁で35cmを測り、残存床面は平坦で軟弱である。カマドは北東隅部に構築され、調査時には火床と構築用石材の散在が認められたにすぎない。カマド左側の北壁は円形状に張り出し、近接して貯蔵穴を想定させる長軸75cm・幅50cm・深さ10cm程の楕円形を呈する土坑がある。

遺物（39図） 出土量は少なく、全て破片出土である。器種には土師器壺(1)・椀(2)・羽釜(3)がある。この他に砥石・叩打器の石製品が出土している。



37図 9号住居址出土土器実測図（1：4）



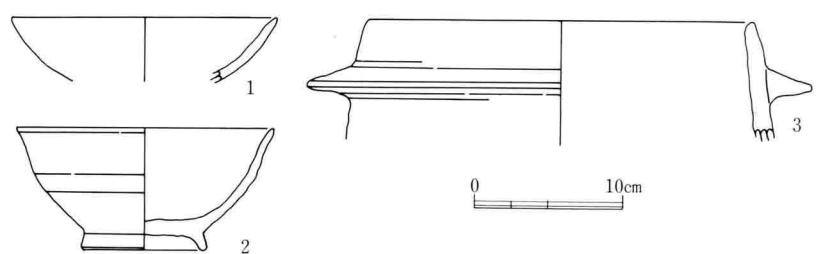
38図 10号住居址実測図 (1 : 80)



III-36 10号住居址カマド



III-37 10号住居址



39図 10号住居址出土土器実測図 (1 : 4)